



# 通常のファイアウォール インターフェイス

この章では、EtherChannel、VLAN サブインターフェイス、IP アドレスなどを含む通常のファイアウォール Threat Defense インターフェイスの設定について説明します。



(注) Firepower 4100/9300 の最初のインターフェイスの設定については、[インターフェイスの設定](#)を参照してください。

- [通常のファイアウォール インターフェイスの要件と前提条件](#) (1 ページ)
- [Firepower 1010 のスイッチポートの設定](#) (2 ページ)
- [ループバック インターフェイスの設定](#) (14 ページ)
- [VLAN サブインターフェイスと 802.1Q トランキングの設定](#) (20 ページ)
- [VXLAN インターフェイスの設定](#) (24 ページ)
- [ルーテッドモードとトランスペアレントモードのインターフェイスの設定](#) (41 ページ)
- [高度なインターフェイスの設定](#) (70 ページ)
- [Secure Firewall Threat Defense の通常のファイアウォール インターフェイスの履歴](#) (83 ページ)

## 通常のファイアウォール インターフェイスの要件と前提条件

モデルのサポート

Threat Defense

ユーザの役割

- 管理者

- アクセス管理者
- ネットワーク管理者

## Firepower 1010 のスイッチポートの設定

Firepower 1010 の各インターフェイスは、通常のファイアウォールインターフェイスとしてまたはレイヤ2ハードウェアスイッチポートとして実行するように設定できます。この項では、スイッチモードの有効化と無効化、VLAN インターフェイスの作成、そのインターフェイスのスイッチポートへの割り当てなど、スイッチポート設定を開始するためのタスクについて説明します。また、この項では、サポート対象のインターフェイスで Power on Ethernet (PoE) をカスタマイズする方法についても説明します。

## Firepower 1010 のスイッチポートについて

このセクションでは、Firepower 1010 のスイッチポートについて説明します。

## Firepower 1010 のポートとインターフェイスについて

### ポートとインターフェイス

Firepower 1010 物理インターフェイスごとに、ファイアウォールインターフェイスまたはスイッチポートとしてその動作を設定できます。物理インターフェイスとポートタイプ、およびスイッチポートを割り当てる論理 VLAN インターフェイスについては、次の情報を参照してください。

- 物理ファイアウォールインターフェイス：ルーテッドモードでは、これらのインターフェイスは、設定済みのセキュリティポリシーを使用してファイアウォールと VPN サービスを適用することによって、レイヤ3のネットワーク間でトラフィックを転送します。トランスペアレントモードでは、これらのインターフェイスは、設定済みのセキュリティポリシーを使用してファイアウォールサービスを適用することによって、レイヤ2の同じネットワーク上のインターフェイス間でトラフィックを転送するブリッジグループメンバーです。ルーテッドモードでは、一部のインターフェイスでブリッジグループメンバーとして、その他のインターフェイスでレイヤ3インターフェイスとして、統合ルーティングおよびブリッジングを使用することもできます。デフォルトでは、イーサネット 1/1 インターフェイスはファイアウォールインターフェイスとして設定されます。また、これらのインターフェイスを IPS 専用（インラインセットとパッシブインターフェイス）に設定することもできます。
- 物理スイッチポート：スイッチポートは、ハードウェアのスイッチ機能を使用して、レイヤ2でトラフィックを転送します。同じ VLAN 上のスイッチポートは、ハードウェアスイッチングを使用して相互に通信できます。トラフィックには、Threat Defense セキュリティポリシーは適用されません。アクセスポートはタグなしトラフィックのみを受け入れ、単一の VLAN に割り当てることができます。トランクポートはタグなしおよびタグ付きトラフィックを受け入れ、複数の VLAN に属することができます。デフォルトでは、

イーサネット 1/2 ~ 1/8 は VLAN 1 のアクセススイッチポートとして設定されています。Management インターフェイスをスイッチポートとして設定することはできません。

- 論理 VLAN インターフェイス：これらのインターフェイスは物理ファイアウォール インターフェイスと同じように動作しますが、サブインターフェイス、IPS 専用インターフェイス（インラインセットおよびパッシブインターフェイス）、または EtherChannel インターフェイスを作成できないという例外があります。スイッチポートが別のネットワークと通信する必要がある場合、Threat Defense デバイスは VLAN インターフェイスにセキュリティポリシーを適用し、別の論理 VLAN インターフェイスまたはファイアウォール インターフェイスにルーティングします。ブリッジグループメンバーとして VLAN インターフェイスで統合ルーティングおよびブリッジングを使用することもできます。同じ VLAN 上のスイッチポート間のトラフィックに Threat Defense セキュリティポリシーは適用されませんが、ブリッジグループ内の VLAN 間のトラフィックにはセキュリティポリシーが適用されるため、ブリッジグループとスイッチポートを階層化して特定のセグメント間にセキュリティポリシーを適用できます。

### Power Over Ethernet

、イーサネット 1/7 およびイーサネット 1/8 は Power on Ethernet+ (PoE+) をサポートしています。

## Auto-MDI/MDIX 機能

すべての Firepower 1010 インターフェイスでは、デフォルトの自動ネゴシエーション設定に Auto-MDI/MDIX 機能も含まれています。Auto-MDI/MDIX は、オートネゴシエーションフェーズでストレート ケーブルを検出すると、内部クロスオーバーを実行することでクロス ケーブルによる接続を不要にします。インターフェイスの Auto-MDI/MDIX を有効にするには、速度とデュプレックスのいずれかをオートネゴシエーションに設定する必要があります。速度とデュプレックスの両方に明示的に固定値を指定すると、両方の設定でオートネゴシエーションが無効にされ、Auto-MDI/MDIX も無効になります。速度と二重通信をそれぞれ 1000 と全二重に設定すると、インターフェイスでは常にオートネゴシエーションが実行されるため、Auto-MDI/MDIX は常に有効になり、無効にできません。

## Firepower 1010 スイッチポートの注意事項と制約事項

### 高可用性 とクラスタリング

- クラスタはサポートされません。
- 高可用性を使用する場合は、スイッチポート機能を使用しないでください。スイッチポートはハードウェアで動作するため、アクティブユニットとスタンバイユニットの両方でトラフィックを通過させ続けます。高可用性は、トラフィックがスタンバイユニットを通過するのを防ぐように設計されていますが、この機能はスイッチポートには拡張されていません。通常の高可用性のネットワーク設定では、両方のユニットのアクティブなスイッチポートがネットワーク ループにつながります。スイッチング機能には外部スイッチを使用することをお勧めします。VLAN インターフェイスはフェールオーバーによってモニ

ターできますが、スイッチポートはモニターできません。理論的には、1つのスイッチポートを VLAN に配置して、高可用性を正常に使用することができますが、代わりに物理ファイアウォールインターフェイスを使用する設定の方が簡単です。

- ファイアウォールインターフェイスはフェールオーバーリンクとしてのみ使用できます。

### 論理 VLAN インターフェイス

- 最大 60 個の VLAN インターフェイスを作成できます。
- また、ファイアウォールインターフェイスで VLAN サブインターフェイスを使用する場合、論理 VLAN インターフェイスと同じ VLAN ID は使用できません。
- MAC アドレス：
  - ルーテッドファイアウォールモード：すべての VLAN インターフェイスが1つの MAC アドレスを共有します。接続スイッチがどれもこのシナリオをサポートできるようにします。接続スイッチに固有の MAC アドレスが必要な場合、手動で MAC アドレスを割り当てることができます。[MAC アドレスの設定 \(77 ページ\)](#) を参照してください。
  - トランスペアレントファイアウォールモード：各 VLAN インターフェイスに固有の MAC アドレスがあります。必要に応じて、手動で MAC アドレスを割り当てて、生成された MAC アドレスを上書きできます。[MAC アドレスの設定 \(77 ページ\)](#) を参照してください。

### ブリッジグループ

同じブリッジグループ内に論理 VLAN インターフェイスと物理ファイアウォールインターフェイスを混在させることはできません。

### VLAN インターフェイスおよびスイッチポートでサポートされていない機能

VLAN インターフェイスおよびスイッチポートは、次の機能をサポートしていません。

- ダイナミック ルーティング
- マルチキャスト ルーティング
- 等コストマルチパス (ECMP) ルーティング
- インラインセットまたはパッシブインターフェイス
- EtherChannel
- フェールオーバーおよびステートリンク
- セキュリティグループタグ (SGT)

### その他の注意事項と制約事項

- Firepower 1010 には、最大 60 個の名前付きインターフェイスを設定できます。
- Management インターフェイスをスイッチポートとして設定することはできません。

### デフォルト設定

- イーサネット 1/1 はファイアウォール インターフェイスです。
- イーサネット 1/2 ~ 1/8 は、VLAN 1 に割り当てられたスイッチポートです。
- デフォルトの速度とデュプレックス：デフォルトでは、速度とデュプレックスは自動ネゴシエーションに設定されます。

## スイッチポートと Power Over Ethernet の設定



スイッチポートおよび PoE を設定するには、次のタスクを実行します。

### スイッチポートモードの有効化または無効化

各インターフェイスは、ファイアウォール インターフェイスまたはスイッチポートのいずれかになるように個別に設定できます。デフォルトでは、イーサネット 1/1 はファイアウォール インターフェイスで、残りのイーサネット インターフェイスはスイッチポートとして設定されます。

#### 手順

**ステップ 1** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス[編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。

**ステップ 2** [スイッチポート (SwitchPort)] 列のスライダをクリックしてスイッチポートモードを設定すると、[有効なスライダ (Slider enabled)] () または[無効なスライダ (Slider disabled)] () と表示されます。

デフォルトでは、スイッチポートは VLAN 1 のアクセスモードに設定されています。トラフィックをルーティングし、Threat Defence セキュリティポリシーに参加するには、論理 VLAN 1 インターフェイス (またはこれらのスイッチポートに設定した任意の VLAN) を手動で追加する必要があります ([VLAN インターフェイスの設定 \(6 ページ\)](#) を参照)。管理インターフェイスをスイッチポートモードに設定することはできません。スイッチポートモードを変更すると、サポートされていないすべての設定が削除されます。



## VLAN インターフェイスの設定

ここでは、関連付けられたスイッチポートで使用するための VLAN インターフェイスの設定方法について説明します。デフォルトでは、スイッチポートは VLAN1 に割り当てられます。トラフィックをルーティングし、Threat Defense セキュリティポリシーに参加するには、論理 VLAN1 インターフェイス（またはこれらのスイッチポートに設定した任意の VLAN）を手動で追加する必要があります。

### 手順

- ステップ 1 [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。
- ステップ 2 [インターフェイスの追加 (Add Interfaces)] > [VLAN インターフェイス (VLAN Interface)] をクリックします。
- ステップ 3 [一般 (General)] で、次の VLAN 固有のパラメータを設定します。

### Add VLAN Interface ?

General IPv4 IPv6 Advanced

Name:

Enabled

Description:

Mode:

Security Zone:

MTU:  
  
(64 - 9198)

Priority:  
 (0 - 65535)

VLAN ID \*:  
  
(1 - 4070)

Disable Forwarding on Interface Vlan:

Associated Interface	Port Mode
No records to display	

既存の VLAN インターフェイスを編集している場合、[関連付けられているインターフェイス (Associated Interface) ] テーブルには、この VLAN のスイッチ ポートが表示されます。

- a) [VLAN ID] を 1 ～ 4070 の範囲に設定します。ただし、内部使用のために予約されている 3968 ～ 4047 の範囲の ID は除きます。

インターフェイスを保存した後、VLANID を変更することはできません。ここでの VLAN ID は、使用される VLAN タグと設定内のインターフェイス ID の両方です。

- b) (任意) [インターフェイスVLANでの転送の無効化 (Disable Forwarding on Interface VLAN) ] の VLAN ID を選択し、別の VLAN への転送を無効にします。

たとえば、1つのVLANをインターネットアクセスの外部に、もう1つを内部ビジネスネットワーク内に、そして3つ目をホームネットワークにそれぞれ割り当てます。自宅のネットワークはビジネスネットワークにアクセスする必要がないので、自宅のVLANで転送を無効にできます。ビジネスネットワークは自宅のネットワークにアクセスできますが、その反対はできません。

**ステップ4** インターフェイス設定を完了するには、次のいずれかの手順を参照してください。

- [ルーテッドモードのインターフェイスの設定 \(45 ページ\)](#)
- [ブリッジグループメンバーの一般的なインターフェイスパラメータの設定 \(52 ページ\)](#)

**ステップ5** [OK] をクリックします。

**ステップ6** [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

---

## スイッチポートのアクセスポートとしての設定

1つのVLANにスイッチポートを割り当てるには、アクセスポートとして設定します。アクセスポートは、タグなしのトラフィックのみを受け入れます。デフォルトでは、Ethernet1/2～1/8のスイッチポートはVLAN 1に割り当てられています。



(注) Firepower 1010 およびでは、ネットワーク内のループ検出のためのスパニングツリープロトコルはサポートされません。したがって、Threat Defense とのすべての接続は、ネットワークループ内で終わらないようにする必要があります。

---

### 手順

**ステップ1** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス[編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。

**ステップ2** 編集するインターフェイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。



図 1: 物理インターフェイスの編集

The screenshot shows the 'Edit Physical Interface' configuration window. It has two tabs: 'General' and 'Hardware Configuration'. Under the 'General' tab, the following fields are visible:  
- Interface ID: Ethernet1/2  
- Enabled:   
- Description: [Empty text box]  
- Port Mode: Access (dropdown menu)  
- VLAN ID: 1 (with a note '(1 - 4070)')  
- Protected:

- ステップ 3** [有効 (Enabled)] チェック ボックスをオンにして、インターフェイスを有効化します。
- ステップ 4** (任意) [Description] フィールドに説明を追加します。  
説明は 200 文字以内で、改行を入れずに 1 行で入力します。
- ステップ 5** [ポートモード (Port Mode)] を [アクセス (Access)] に設定します。
- ステップ 6** [VLAN ID] フィールドで、このスイッチポートの VLAN を 1 ~ 4070 の範囲で設定します。  
デフォルトの VLAN ID は 1 です。
- ステップ 7** (任意) このスイッチポートを保護対象として設定するには、[保護済み (Protected)] チェックボックスをオンにします。これにより、スイッチポートが同じ VLAN 上の他の保護されたスイッチポートと通信するのを防ぐことができます。  
  
スイッチポート上のデバイスが主に他の VLAN からアクセスされる場合、VLAN 内アクセスを許可する必要がない場合、および感染やその他のセキュリティ侵害に備えてデバイスを相互に分離する場合に、スイッチポートが相互に通信しないようにします。たとえば、3つの Web サーバーをホストする DMZ がある場合、各スイッチポートで [保護済み (Protected)] を有効にすると、Web サーバーを相互に分離できます。内部ネットワークと外部ネットワークはいずれも 3つの Web サーバーすべてと通信でき、その逆も可能ですが、Web サーバーは相互に通信できません。
- ステップ 8** (任意) [ハードウェア構成 (Hardware Configuration)] をクリックして、デュプレックスと速度を設定します。

図 2: ハードウェア構成

The screenshot shows the 'Edit Physical Interface' configuration window. The 'Hardware Configuration' tab is selected. Under the 'Speed' section, the 'Duplex' dropdown menu is set to 'full' and the 'Speed' dropdown menu is set to '1gbps'. The 'Auto-negotiation' checkbox is checked.

[自動ネゴシエーション (Auto-negotiation)] チェックボックス (デフォルト) をオンにして、速度とデュプレックスを自動検出します。このチェックボックスをオフにすると、速度とデュプレックスを手動で設定できます。

- [デュプレックス (Duplex)] : [全 (Full)]、[半 (Half)]、または [自動 (Auto)] を選択します。
- [速度 (Speed)] : [10mbps]、[100mbps]、または [1gbps] を選択します。

**ステップ 9** [OK] をクリックします。

**ステップ 10** [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

## スイッチポートのトランクポートとしての設定

この手順では、802.1Q タグ付けを使用して複数の VLAN を伝送するトランクポートの作成方法について説明します。トランクポートは、タグなしトラフィックとタグ付きトラフィックを受け入れます。許可された VLAN のトラフィックは、トランクポートを変更せずに通過します。

トランクは、タグなしトラフィックを受信すると、そのトラフィックをネイティブ VLAN ID にタグ付けして、ASA が正しいスイッチポートにトラフィックを転送したり、別のファイアウォールインターフェイスにルーティングしたりできるようにします。ASA は、トランクポートからネイティブ VLAN ID トラフィックを送信する際に VLAN タグを削除します。タグなしトラフィックが同じ VLAN にタグ付けされるように、他のスイッチのトランクポートに同じネイティブ VLAN を設定してください。

## 手順

**ステップ 1** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。

**ステップ 2** 編集するインターフェイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。

図 3: トランクポートモードの設定

The screenshot shows the 'Edit Physical Interface' configuration page. The 'Hardware Configuration' tab is selected. The 'Interface ID' is 'Ethernet1/2'. The 'Enabled' checkbox is unchecked. The 'Description' field is empty. The 'Port Mode' dropdown is set to 'Trunk'. The 'Native VLAN ID' is '1'. The 'Allowed VLAN IDs' field contains '100,200,300'. The 'Protected' checkbox is unchecked.

**ステップ 3** [有効 (Enabled)] チェック ボックスをオンにして、インターフェイスを有効化します。

**ステップ 4** (任意) [Description] フィールドに説明を追加します。

説明は 200 文字以内で、改行を入れずに 1 行で入力します。

**ステップ 5** [ポートモード (Port Mode)] を [トランク (Trunk)] に設定します。

**ステップ 6** [ネイティブ VLAN ID (Native VLAN ID)] フィールドで、このスイッチ ポートのネイティブ VLAN を 1 ~ 4070 の範囲で設定します。

デフォルトのネイティブ VLAN ID は 1 です。

各ポートのネイティブ VLAN は 1 つのみですが、すべてのポートに同じネイティブ VLAN または異なるネイティブ VLAN を使用できます。

**ステップ 7** [許可 VLAN ID (Allowed VLAN IDs)] フィールドで、このトランク ポートの VLAN を 1 ~ 4070 の範囲で入力します。

次のいずれかの方法で最大 20 個の ID を指定できます。

- 単一の番号 (n)

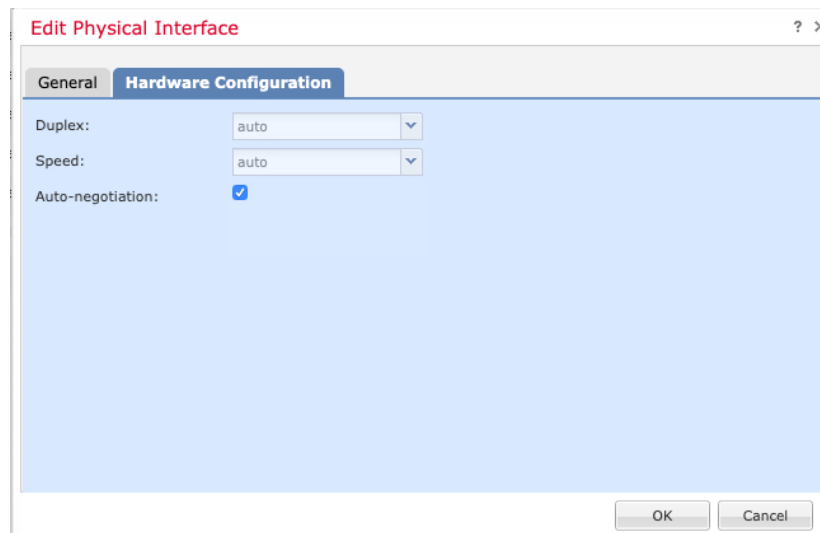
- 範囲 (n-x)
- 番号および範囲は、カンマで区切ります。たとえば、次のように指定します。  
5,7-10,13,45-100  
カンマの代わりにスペースを入力できます。

このフィールドにネイティブ VLAN を含めても無視されます。トランクポートは、ネイティブ VLAN トラフィックをポートから送信するときに、常に VLAN タグを削除します。また、まだネイティブ VLAN タグが付いているトラフィックを受信しません。

**ステップ 8** (任意) このスイッチポートを保護対象として設定するには、[保護済み (Protected)] チェックボックスをオンにします。これにより、スイッチポートが同じ VLAN 上の他の保護されたスイッチポートと通信するのを防ぐことができます。

スイッチポート上のデバイスが主に他の VLAN からアクセスされる場合、VLAN 内アクセスを許可する必要がない場合、および感染やその他のセキュリティ侵害に備えてデバイスを相互に分離する場合に、スイッチポートが相互に通信しないようにします。たとえば、3つの Web サーバーをホストする DMZ がある場合、各スイッチポートで [保護済み (Protected)] を有効にすると、Web サーバーを相互に分離できます。内部ネットワークと外部ネットワークはいずれも 3つの Web サーバーすべてと通信でき、その逆も可能ですが、Web サーバーは相互に通信できません。

**ステップ 9** (任意) [ハードウェア構成 (Hardware Configuration)] をクリックして、デュプレックスと速度を設定します。



[自動ネゴシエーション (Auto-negotiation)] チェックボックス (デフォルト) をオンにして、速度とデュプレックスを自動検出します。このチェックボックスをオフにすると、速度とデュプレックスを手動で設定できます。

- [デュプレックス (Duplex)] : [全 (Full)]、[半 (Half)]、または [自動 (Auto)] を選択します。

- [速度 (Speed)] : [10mbps]、[100mbps]、または [1gbps] を選択します。

ステップ 10 [OK] をクリックします。

ステップ 11 [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

## Power over Ethernet の設定

では、Ethernet 1/7 および Ethernet 1/8 は、IP 電話や無線アクセスポイントなどのデバイス用に Power over Ethernet (PoE) をサポートします。Firepower 1010 は、IEEE 802.3af (PoE) と 802.3at (PoE+) の両方をサポートしています。PoE+ は、Link Layer Discovery Protocol (LLDP) を使用して電力レベルをネゴシエートします。PoE+ は、受電デバイスに最大 30 ワットの電力を提供できます。電力は必要なときのみ供給されます。

スイッチポートをシャットダウンする場合、ポートをファイアウォールインターフェイスとして設定する場合は、デバイスへの電源を無効にします。

では、PoE は、デフォルトで Ethernet 1/7 および Ethernet 1/8 で有効になっています。この手順では、PoE を無効および有効にする方法と、オプションパラメータを設定する方法について説明します。

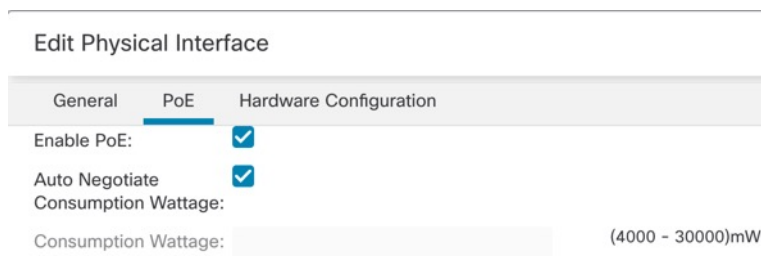
### 手順

ステップ 1 [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス[編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。

ステップ 2 の [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。

ステップ 3 [PoE] をクリックします。

図 4: PoE



ステップ 4 [PoE を有効にする (Enable PoE)] チェックボックスをオンにします。

PoE はデフォルトでイネーブルです。

**ステップ 5** (任意) [消費ワット数の自動ネゴシエート (Auto Negotiate Consumption Wattage)] チェックボックスをオフにして、必要なワット数を正確に把握している場合は、[消費ワット数 (Consumption Wattage)] を入力します。

デフォルトでは、PoEは給電先デバイスのクラスに適したワット数を使用して、給電先デバイスに自動的に電力を供給します。Firepower 1010 およびは LLDP を使用して、適切なワット数をさらにネゴシエートします。特定のワット数が判明して、LLDP ネゴシエーションを無効にする場合は、4000 ~ 3 万ミリワットの値を入力します。

**ステップ 6** [OK] をクリックします。

**ステップ 7** [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

---

## ループバック インターフェイスの設定

ここでは、ループバック インターフェイスを設定する方法について説明します。

### ループバック インターフェイスについて

ループバック インターフェイスは、物理インターフェイスをエミュレートするソフトウェア専用インターフェイスであり、複数の物理インターフェイスを介して IPv4 および IPv6 に到達できます。ループバック インターフェイスはパス障害の克服に役立ちます。任意の物理インターフェイスからアクセスできるため、1 つがダウンした場合、別のインターフェイスからループバック インターフェイスにアクセスできます。

ループバック インターフェイスは、次の目的で使用できます。

- AAA
- BGP
- DNS
- HTTP
- ICMP
- IPsec フローのオフロード : Cisco Secure Firewall 3100 および 4200 のみ。
- NetFlow
- SNMP
- SSH
- スタティックおよびダイナミック VTI トンネル
- Syslog

Threat Defense は、ダイナミック ルーティング プロトコルを使用してループバックアドレスを配布できます。または、ピアデバイスでスタティックルートを設定して、Threat Defense のいずれかの物理インターフェイスを介してループバック IP アドレスに到達できます。Threat Defense では、ループバック インターフェイスを指定するスタティックルートを設定できません。

#### 関連トピック

[ループバック インターフェイスのガイドラインと制限事項](#) (15 ページ)

[ループバック インターフェイスの設定](#) (15 ページ)

## ループバック インターフェイスのガイドラインと制限事項

### ファイアウォール モード

- ルーテッド モードのみでサポートされます。

### 高可用性 と クラスタリング

- クラスタリングはサポートされません。

### その他のガイドラインと制限事項

- 物理インターフェイスからループバック インターフェイスへのトラフィックでは、TCP シーケンスのランダム化は常に無効になっています。

## ループバック インターフェイスの設定

デバイスのループバック インターフェイスを追加するには、次の手順を実行します。

### 手順

- ステップ 1** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。
- ステップ 2** [インターフェイスの追加 (Add Interfaces)] ドロップダウンリストから、[ループバック インターフェイス (Loopback Interface)] を選択します。
- ステップ 3** [一般 (General)] タブで、次のパラメータを設定します。
  - a) [名前 (Name)] : ループバック インターフェイスの名前を入力します。
  - b) [有効 (Enabled)] : ループバック インターフェイスを有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
  - c) [ループバック ID (Loopback ID)] : 1 ~ 1024 のループバック ID を入力します。
  - d) [説明 (Description)] : ループバック インターフェイスの説明を入力します。

- ステップ 4** ルーテッドモード インターフェイスのパラメータを設定します。ルーテッドモードのインターフェイスの設定 (45 ページ) を参照してください。

## ループバック インターフェイスへのトラフィックのレート制限

### 始める前に

システムに過剰な負荷がかからないように、ループバック インターフェイス IP アドレスに送信されるトラフィックのレートを制限する必要があります。グローバルサービスポリシーに接続制限ルールを追加できます。

### 手順

- ステップ 1** ループバック インターフェイス IP アドレスへのトラフィックを識別する拡張アクセスリストを作成します。
- [**オブジェクト (Objects)**] > [**オブジェクト管理 (Object Management)**] を選択し、コンテンツテーブルから [**アクセスコントロールリスト (Access Control Lists)**] > [**拡張 (Extended)**] を選択します。
  - [**拡張アクセスリストの追加 (Add Extended Access List)**] をクリックして、新しい ACL を作成します。
  - [**新しい拡張アクセスリストオブジェクト (New Extended Access List Object)**] ダイアログボックスで、ACL の名前を入力し (スペースは使用不可)、[**追加 (Add)**] をクリックして新しいエントリを作成します。

図 5: ACL の命名とエントリの追加

New Extended Access List Object

Name  
rate-limiting

Entries (0)

Add

- [**ネットワーク (Network)**] タブで、送信元 (任意) および宛先アドレス (ループバック IP アドレス) を設定します。



図 6: 送信元と宛先のネットワーク

(注) デフォルトの [アクション (Action)] は [許可 (一致) (Allow (match))] にし、その他の設定はそのままにします。

- [送信元 (Source) ]: [使用可能なネットワーク (Available Networks) ] リストから **any** を選択し、[送信元に追加 (Add to Source) ] をクリックします。 **any** の代わりに送信元 IP アドレスを指定して、このアクセスリストを絞り込むこともできます。
  - [宛先 (Destination) ]: [宛先ネットワーク (Destination Networks) ] リストの下の編集ボックスにアドレスを入力し、[追加 (Add) ] をクリックします。ループバックインターフェイスごとに手順を繰り返します。
- e) [追加 (Add) ] をクリックして、エントリを ACL に追加します。
- f) [保存 (Save) ] をクリックして、ACL を保存します。

図 7: ACL の保存

Edit Extended Access List Object

Name  
rate-limiting

Entries (1)

Sequence	Action	Source	Source Port	Destination	Destination Port	Application	Users	SGT
1	Allow	any	Any	10.1.1.1 10.2.1.1	Any	Any	Any	Any

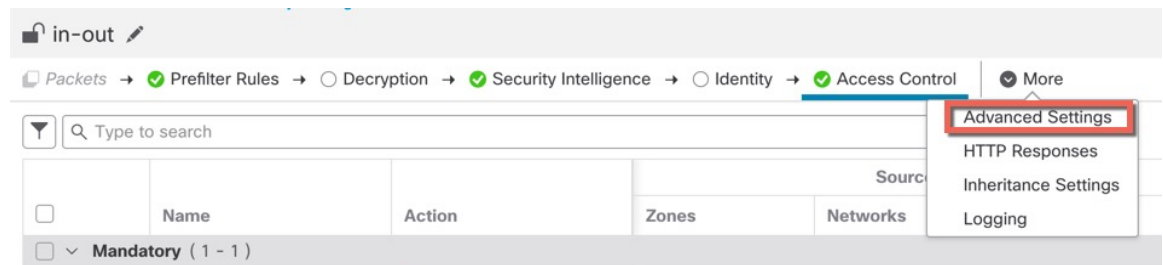
Allow Overrides

Cancel Save

**ステップ 2** [ポリシー (Policy)] > [アクセス制御 (Access Control)] > [アクセス制御 (Access Control)] の順に選択し、デバイスに割り当てられているアクセスコントロールポリシーの[編集 (Edit)] (✎) をクリックします。

**ステップ 3** パケットフロー行の最後にある[詳細 (More)] ドロップダウン矢印から[詳細設定 (Advanced Settings)] をクリックします。

図 8: 詳細設定



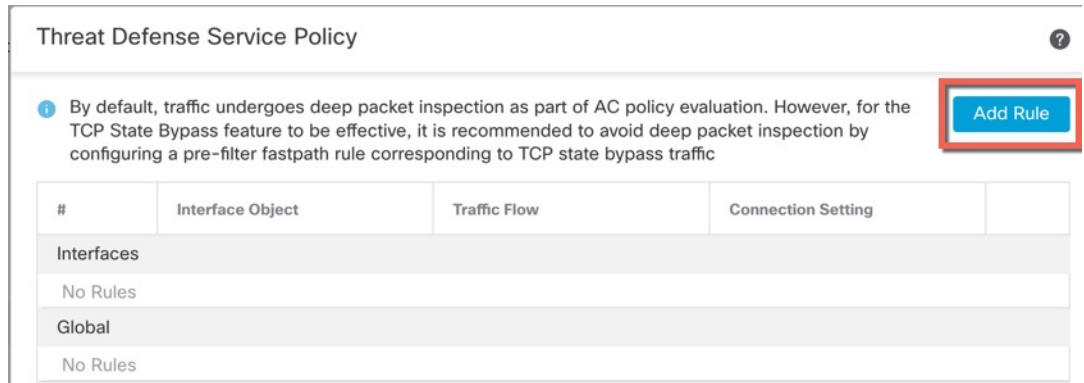
**ステップ 4** [Threat Defense サービスポリシー (Threat Defense Service Policy)] グループで[編集 (Edit)] (✎) をクリックします。

図 9: Threat Defense サービス ポリシー



**ステップ 5** [ルールの追加 (Add Rule)] をクリックして、新しいルールを作成します。

図 10: [ルールを追加 (Add Rule) ]



サービス ポリシー ルール ウィザードが開き、ルール の設定プロセスの手順が表示されます。

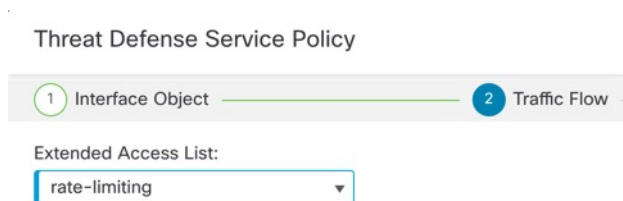
- ステップ 6** [インターフェイス オブジェクト (Interface Object) ] ステップで、[グローバル (Global) ] をクリックしてすべてのインターフェイスに適用されるグローバルルールを作成し、[次へ (Next) ] をクリックします。

図 11: グローバルポリシー



- ステップ 7** [トラフィックフロー (Traffic Flow) ] ステップで、[ステップ 1 \(16 ページ\)](#) で作成した拡張アクセスリストオブジェクトを選択し、[次へ (Next) ] をクリックします。

図 12: 拡張アクセスリストの選択



- ステップ 8** [接続設定 (Connection Setting) ] ステップで、[接続制限 (Connections limit) ] を設定します。

図 13: 接続制限の設定

Threat Defense Service Policy

1 Interface Object — 2 Traffic Flow — 3 Connection Setting

Enable TCP State Bypass  Randomize TCP Sequence Number  Enable Decrement TTL

Connections:	Maximum TCP & UDP 24	Maximum Embryonic 12
Connections Per Client:	Maximum TCP & UDP 0	Maximum Embryonic 0

[最大TCPおよびUDP (Maximum TCP & UDP)] 接続数をループバック インターフェイスの予期される接続数に設定し、[最大初期接続数 (Maximum Embryonic)] の接続数をそれよりも低い数に設定します。予期される必要なループバック インターフェイスセッション数に応じて、たとえば、5/2、10/5、または 1024/512 に設定できます。

初期接続制限を設定すると TCP 代行受信が有効になります。この代行受信によって、TCP SYN パケットを使用してインターフェイスをフラッドする DoS 攻撃からシステムを保護します。

- ステップ 9 [終了 (Finish)] をクリックして変更を保存します。
- ステップ 10 [OK] をクリックします。
- ステップ 11 [詳細設定 (Advanced Settings)] ウィンドウで [保存 (Save)] をクリックします。
- ステップ 12 これで、影響を受けるデバイスに変更を展開できます。

## VLAN サブインターフェイスと 802.1Q トランキングの設定

VLAN サブインターフェイスを使用すると、1つの物理インターフェイス、冗長インターフェイス、または EtherChannel インターフェイスを、異なる VLAN ID でタグ付けされた複数の論理インターフェイスに分割できます。VLAN サブインターフェイスが1つ以上あるインターフェイスは、自動的に 802.1Q トランクとして設定されます。VLAN では、所定の物理インターフェイス上でトラフィックを分離しておくことができるため、物理インターフェイスまたはデバイスを追加しなくても、ネットワーク上で使用できるインターフェイスの数を増やすことができます。

## VLAN サブインターフェイスのガイドラインと制限事項

### モデルのサポート

- Firepower 1010 : VLAN サブインターフェイスは、スイッチ ポートまたは VLAN インターフェイスではサポートされていません。

### 高可用性とクラスタリング

フェールオーバーリンクまたは状態リンクやクラスタ制御リンクのサブインターフェイスを使用することはできません。例外はマルチインスタンスモードの場合です。その場合、これらのリンクにはシャーシ定義サブインターフェイスを使用できます。

### その他のガイドライン

- 物理インターフェイス上のタグなしパケットの禁止 : サブインターフェイスを使用する場合、物理インターフェイスでトラフィックを通過させないようにすることもよくあります。物理インターフェイスはタグのないパケットを通過させることができるためです。この特性は、冗長インターフェイスペアのアクティブな物理インターフェイスと EtherChannel リンクにも当てはまります。サブインターフェイスでトラフィックを通過させるには物理、冗長、または EtherChannel インターフェイスを有効にする必要があるため、インターフェイスに名前を設定しないことでトラフィックを通過させないようにします。物理インターフェイス、冗長インターフェイス、または EtherChannel インターフェイスでタグのないパケットを通過させる場合は、通常通り名前を設定できます。
- 管理インターフェイスのサブインターフェイスは設定できません。
- 同じ親インターフェイスのすべてのサブインターフェイスは、ブリッジグループメンバーカルテッドインターフェイスのいずれかである必要があります。混在および一致はできません。
- Threat Defense はダイナミック トランキング プロトコル (DTP) をサポートしないため、接続されているスイッチポートを無条件にトランキングするように設定する必要があります。
- 親インターフェイスと同じ組み込みの MAC アドレスを使用するので、Threat Defense で定義されたサブインターフェイスに一意的 MAC アドレスを割り当てることもできます。たとえば、サービス プロバイダーによっては、MAC アドレスに基づいてアクセス制御を行う場合があります。また、IPv6 リンクローカルアドレスは MAC アドレスに基づいて生成されるため、サブインターフェイスに一意的 MAC アドレスを割り当てることで、一意的 IPv6 リンクローカルアドレスが可能になり、Threat Defense で特定のインスタンスでのトラフィックの中断を避けることができます。

## デバイスモデルによる VLAN サブインターフェイスの最大数

デバイスモデルにより、設定できる VLAN サブインターフェイスの最大数が制限されます。データ インターフェイスでのみサブインターフェイスを設定することができ、管理インターフェイスでは設定できないことに注意してください。

次の表で、各デバイスモデルの制限について説明します。

モデル	VLAN サブインターフェイスの最大数
Firepower 1010	60
Firepower 1120	512
Firepower 1140、1150	1024
Firepower 2100	1024
Cisco Secure Firewall 3100	1024
Firepower 4100	1024
Firepower 9300	1024
Threat Defense Virtual	50
ISA 3000	100

## サブインターフェイスの追加

1 つ以上のサブインターフェイスを物理インターフェイス、冗長インターフェイス、または PortChannel インターフェイスに追加します。

Firepower 4100/9300 の場合、コンテナインターフェイスで使用するためのサブインターフェイスを FXOS で作成します。[コンテナ インスタンスの VLAN サブインターフェイスの追加](#)を参照してください。これらのサブインターフェイスは Management Center のインターフェイスリストに表示されます。Management Center にサブインターフェイスを追加することもできますが、FXOS にサブインターフェイスが定義されていない親インターフェイス上に限ります。



- (注) 親の物理インターフェイスがタグなしの packets を渡します。タグなしの packets を渡さない場合は、セキュリティ ポリシーの親インターフェイスが含まれていないことを確認します。

## 手順

- ステップ 1 [デバイス (Devices) ]>[デバイス管理 (Device Management) ]を選択し、Threat Defense デバイス[編集 (Edit) ] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces) ]タブがデフォルトで選択されます。
- ステップ 2 物理インターフェイスの有効化およびイーサネット設定の構成に従って、親インターフェイスを有効にします。
- ステップ 3 [インターフェイスの追加 (Add Interfaces) ]>[サブインターフェイス (Sub Interface) ]をクリックします。
- ステップ 4 [全般 (General) ]で、次のパラメータを設定します。

図 14: サブインターフェイスの追加

**Add Sub Interface**

General IPv4 IPv6 Path Monitoring Advanced

Name: inside-100

Enabled  
 Management Only

Description:

Security Zone: inside\_zone

MTU: 1500  
(64 - 9198)

Priority: 0 (0 - 65535)

Propagate Security Group Tag:

Interface \*: Ethernet1/1

Enabled

Sub-Interface ID \*: 100  
(1 - 4294967295)

VLAN ID: 100  
(1 - 4094)

Cancel OK

- a) [インターフェイス (Interface)]: サブインターフェイスを追加する物理、冗長、またはポートチャンネルインターフェイスを選択します。
- b) [サブインターフェイス ID (Sub-Interface ID)]: サブインターフェイス ID を 1 ~ 4294967295 の範囲の整数で入力します。許可されるサブインターフェイスの番号は、プラットフォームによって異なります。設定後は ID を変更できません。
- c) [VLAN ID]: VLAN ID を 1 ~ 4094 の範囲で入力します。これは、このサブインターフェイス上のパケットにタグを付けるために使用されます。

この VLAN ID は一意である必要があります。

**ステップ 5** [OK] をクリックします。

**ステップ 6** [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

**ステップ 7** ルーテッドまたはトランスペアレント モード インターフェイスのパラメータを設定します。[ルーテッドモードのインターフェイスの設定 \(45 ページ\)](#) または [ブリッジグループインターフェイスの設定 \(51 ページ\)](#) を参照してください。

## VXLAN インターフェイスの設定

この章では、仮想拡張 LAN (VXLAN) インターフェイスの設定方法について説明します。VXLAN インターフェイスは、レイヤ 2 ネットワークを拡張するために、レイヤ 3 物理ネットワーク上のレイヤ 2 仮想ネットワークとして機能します。

### VXLAN インターフェイスについて

VXLAN は、VLAN の場合と同じイーサネットレイヤ 2 ネットワークサービスを提供しますが、より優れた拡張性と柔軟性を備えています。VLAN と比較して、VXLAN には次の利点があります。

- データセンター全体でのマルチテナントセグメントの柔軟な配置。
- より多くのレイヤ 2 セグメント (最大 1600 万の VXLAN セグメント) に対応するための高度なスケーラビリティ。

ここでは、VXLAN の動作について説明します。VXLAN の詳細については、RFC 7348 を参照してください。Geneve の詳細については、RFC 8926 を参照してください。

### カプセル化

Threat Defense は、次の 2 種類の VXLAN カプセル化をサポートしています。

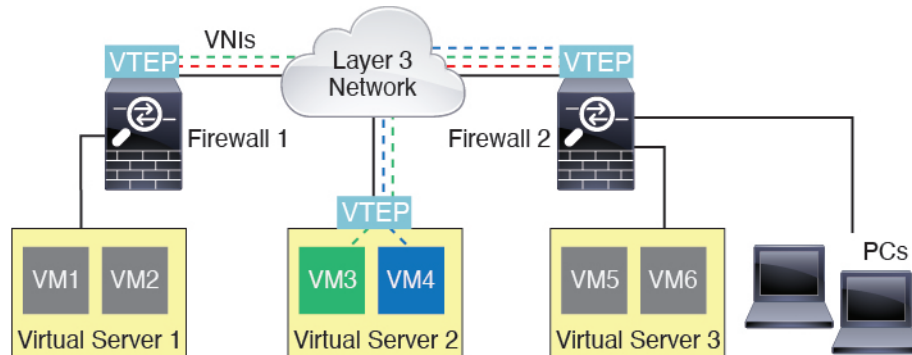


- VXLAN (すべてのモデル) : VXLAN は、MAC Address-in-User Datagram Protocol (MAC-in-UDP) のカプセル化を使用します。元のレイヤ 2 フレームに VXLAN ヘッダーが追加され、UDP-IP パケットに置かれます。
- Geneve (Threat Defense Virtual のみ) : Geneve には、MAC アドレスに限定されない柔軟な内部ヘッダーがあります。Geneve カプセル化は、Amazon Web Services (AWS) ゲートウェイロードバランサとアプライアンス間のパケットの透過的なルーティング、および追加情報の送信に必要です。

## VXLAN トンネル エンドポイント

VXLAN トンネルエンドポイント (VTEP) デバイスは、VXLAN のカプセル化およびカプセル化解除を実行します。各 VTEP には 2 つのインターフェイス タイプ (セキュリティ ポリシーを適用する VXLAN Network Identifier (VNI) インターフェイスと呼ばれる 1 つ以上の仮想インターフェイスと、VTEP 間に VNI をトンネリングする VTEP 送信元インターフェイスと呼ばれる通常のインターフェイス) があります。VTEP 送信元インターフェイスは、VTEP 間通信のトランスポート IP ネットワークに接続されます。

次の図は、2 つの Threat Defense と、レイヤ 3 ネットワークを介して VTEP として機能し、サイト間の VNI 1、2、3 を拡張する仮想サーバ 2 を示します。Threat Defense は、VXLAN ネットワークと非 VXLAN ネットワーク間のブリッジまたはゲートウェイとして機能します。



VTEP 間の基盤となる IP ネットワークは、VXLAN オーバーレイに依存しません。カプセル化されたパケットは、発信元 IP アドレスとして開始 VTEP を持ち、宛先 IP アドレスとして終端 VTEP を持っており、外部 IP アドレス ヘッダーに基づいてルーティングされます。VXLAN カプセル化の場合：宛先 IP アドレスは、リモート VTEP が不明な場合、マルチキャストグループにすることができます。Geneve では、Threat Defense はスタティックピアのみをサポートします。デフォルトでは、VXLAN の宛先ポートは UDP ポート 4789 です (ユーザーが設定可能)。Geneve の宛先ポートは 6081 です。

## VTEP 送信元インターフェイス

VTEP 送信元インターフェイスは、すべての VNI インターフェイスに関連付けられる通常のインターフェイス (物理、EtherChannel、または VLAN) です。Threat Defense Virtual ごとに 1 つの VTEP 送信元インターフェイスを設定できます。設定できる VTEP 送信元インターフェイスは 1 つだけであるため、VXLAN インターフェイスと Geneve インターフェイスの両方を同じ

デバイスに設定することはできません。AWS または Azure での Threat Defense Virtual クラスタリングには例外があり、2つの VTEP ソースインターフェイスを使用することができます。VXLAN インターフェイスはクラスタ制御リンクに使用され、Geneve (AWS) または VXLAN (Azure) インターフェイスはゲートウェイロードバランサに使用できます。

VTEP 送信元インターフェイスは、VXLAN トラフィック専用にすることができますが、その使用に制限されません。必要に応じて、インターフェイスを通常のトラフィックに使用し、そのトラフィックのインターフェイスにセキュリティ ポリシーを適用できます。ただし、VXLAN トラフィックの場合は、すべてのセキュリティポリシーを VNI インターフェイスに適用する必要があります。VTEP インターフェイスは、物理ポートとしてのみ機能します。

トランスペアレントファイアウォールモードでは、VTEP 送信元インターフェイスは、BVI の一部ではないため、その IP アドレスを設定しません。このインターフェイスは、管理インターフェイスが処理される方法に似ています。

## VNI インターフェイス

VNI インターフェイスは VLAN インターフェイスに似ています。VNI インターフェイスは、タギングを使用して特定の物理インターフェイスでのネットワークトラフィックの分割を維持する仮想インターフェイスです。各 VNI インターフェイスにセキュリティ ポリシーを直接適用します。

追加できる VTEP インターフェイスは 1 つだけで、すべての VNI インターフェイスは、同じ VTEP インターフェイスに関連付けられます。AWS または Azure での Threat Defense Virtual クラスタリングには例外があります。AWS クラスタリングの場合、2つの VTEP ソースインターフェイスを使用することができます。VXLAN インターフェイスはクラスタ制御リンクに使用され、Geneve インターフェイスは AWS ゲートウェイロードバランサに使用できます。Azure クラスタリングの場合、2つの VTEP ソースインターフェイスを使用することができます。VXLAN インターフェイスはクラスタ制御リンクに使用され、2つ目の VXLAN インターフェイスは Azure ゲートウェイロードバランサに使用できます。

## VXLAN パケット処理

### VXLAN

VTEP 送信元インターフェイスを出入りするトラフィックは、VXLAN 処理、特にカプセル化または非カプセル化の対象となります。

カプセル化処理には、次のタスクが含まれます。

- VTEP 送信元インターフェイスにより、VXLAN ヘッダーが含まれている内部 MAC フレームがカプセル化されます。
- UDP チェックサム フィールドがゼロに設定されます。
- 外部フレームの送信元 IP が VTEP インターフェイスの IP に設定されます。
- 外部フレームの宛先 IP がリモート VTEP IP ルックアップによって決定されます。

カプセル化解除については、次の場合に Threat Defense によって VXLAN パケットのみがカプセル化解除されます。

- これが、宛先ポートが 4789 に設定された UDP パケットである場合（この値はユーザー設定可能です）。
- 入力インターフェイスが VTEP 送信元インターフェイスである場合。
- 入力インターフェイスの IP アドレスが宛先 IP アドレスと同じになります。
- VXLAN パケット形式が標準に準拠します。

### Geneve

VTEP 送信元インターフェイスを出入りするトラフィックは、Geneve 処理、特にカプセル化または非カプセル化の対象となります。

カプセル化処理には、次のタスクが含まれます。

- VTEP 送信元インターフェイスにより、Geneve ヘッダーが含まれている内部 MAC フレームがカプセル化されます。
- UDP チェックサム フィールドがゼロに設定されます。
- 外部フレームの送信元 IP が VTEP インターフェイスの IP に設定されます。
- 外部フレームの宛先 IP には、設定したピア IP アドレスが設定されます。

カプセル化解除については、次の場合に ASA によって Geneve パケットのみがカプセル化解除されます。

- これが、宛先ポートが 6081 に設定された UDP パケットである場合（この値はユーザー設定可能です）。
- 入力インターフェイスが VTEP 送信元インターフェイスである場合。
- 入力インターフェイスの IP アドレスが宛先 IP アドレスと同じになります。
- Geneve パケット形式が標準に準拠します。

## ピア VTEP

Threat Defense がピア VTEP の背後にあるデバイスにパケットを送信する場合、Threat Defense には次の 2 つの重要な情報が必要です。

- リモートデバイスの宛先 MAC アドレス
- ピア VTEP の宛先 IP アドレス

Threat Defense は VNI インターフェイスのリモート VTEP IP アドレスに対する宛先 MAC アドレスのマッピングを維持します。

## VXLAN ピア

Threat Defense がこの情報を検出するには2つの方法があります。

- 単一のピア VTEP IP アドレスを Threat Defense に静的に設定できます。

IPv4 の場合：Threat Defense が VXLAN カプセル化 ARP ブロードキャストを VTEP に送信し、エンドノードの MAC アドレスを取得します。

IPv6 の場合：Threat Defense は IPv6 ネイバー要請メッセージを IPv6 要請ノードマルチキャストアドレスに送信します。ピア VTEP は、そのリンクローカルアドレスを使用して IPv6 ネイバー アドバタイズメント メッセージで応答します。

- ピア VTEP IP アドレスのグループを Threat Defense に静的に設定できます。

IPv4 の場合：Threat Defense が VXLAN カプセル化 ARP ブロードキャストを VTEP に送信し、エンドノードの MAC アドレスを取得します。

IPv6 の場合：Threat Defense は IPv6 ネイバー要請メッセージを IPv6 要請ノードマルチキャストアドレスに送信します。ピア VTEP は、そのリンクローカルアドレスを使用して IPv6 ネイバー アドバタイズメント メッセージで応答します。

- マルチキャストグループは、VNI インターフェイスごとに（または VTEP 全体に）設定できます。

IPv4 の場合：Threat Defense は、IP マルチキャストパケット内の VXLAN カプセル化 ARP ブロードキャストパケットを VTEP 送信元インターフェイスを経由して送信します。この ARP 要求への応答により、Threat Defense はリモート VTEP の IP アドレスと、リモートエンドノードの宛先 MAC アドレスの両方を取得することができます。

IPv6 の場合：Threat Defense は、VTEP 送信元インターフェイスを経由してマルチキャストリスナー検出 (MLD) レポートメッセージを送信し、Threat Defense が VTEP インターフェイスでマルチキャストアドレストラフィックをリッスンしていることを示します。

このオプションは、Geneve ではサポートされていません。

## Geneve ピア

Threat Defense Virtual は、静的に定義されたピアのみをサポートします。AWS ゲートウェイロードバランサで Threat Defense Virtual ピアの IP アドレスを定義できます。Threat Defense Virtual はゲートウェイロードバランサへのトラフィックを開始しないため、Threat Defense Virtual でゲートウェイロードバランサの IP アドレスを指定する必要はありません。Geneve トラフィックを受信すると、ピア IP アドレスを学習します。マルチキャストグループは、Geneve ではサポートされていません。

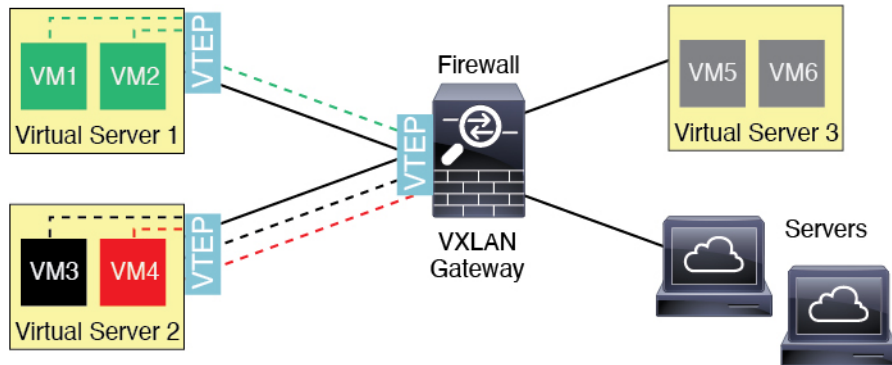
## VXLAN 使用例

ここでは、Threat Defense での VXLAN の実装の使用例について説明します。

### VXLAN ブリッジまたはゲートウェイの概要

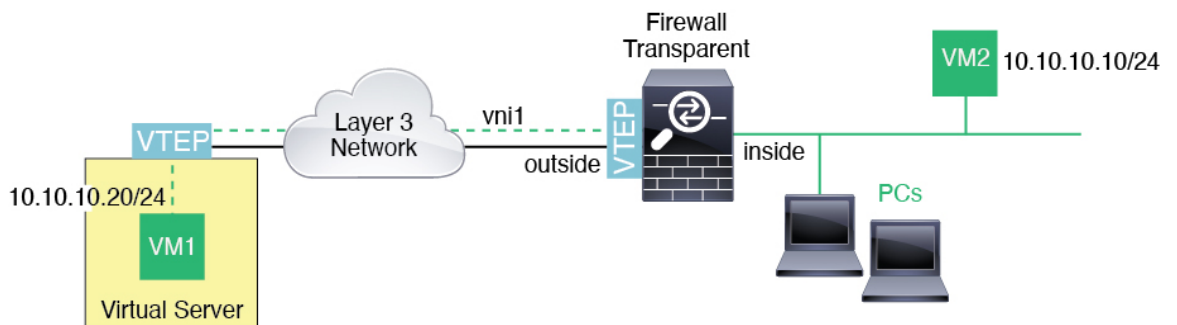
各 Threat Defense の VTEP は、VM、サーバ、PC、VXLAN のオーバーレイ ネットワークなどのエンドノード間のブリッジまたはゲートウェイとして機能します。VTEP 送信元インターフェイスを介して VXLAN カプセル化で受信した受信フレームの場合、Threat Defense は VXLAN ヘッダーを除去して、内部イーサネット フレームの宛先 MAC アドレスに基づいて非 VXLAN ネットワークに接続されている物理インターフェイスに転送します。

Threat Defense は、常に VXLAN パケットを処理します。つまり、他の 2 つの VTEP 間で VXLAN パケットをそのまま転送する訳ではありません。



### VXLAN ブリッジ

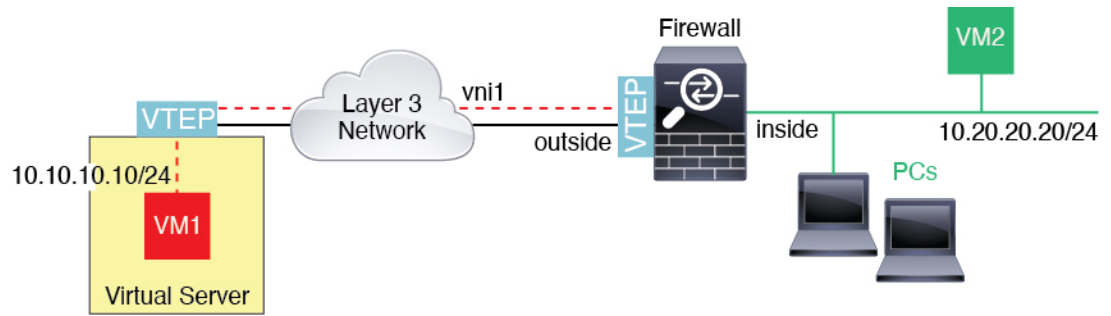
ブリッジグループ（トランスパレント ファイアウォール モードまたは任意ルーテッドモード）を使用する場合、Threat Defense は、同じネットワークに存在する（リモート）VXLAN セグメントとローカルセグメント間の VXLAN ブリッジとして機能できます。この場合、ブリッジグループのメンバーは通常インターフェイス 1 つのメンバーが通常のインターフェイスで、もう 1 つのメンバーが VNI インターフェイスです。



### VXLAN ゲートウェイ（ルーテッドモード）

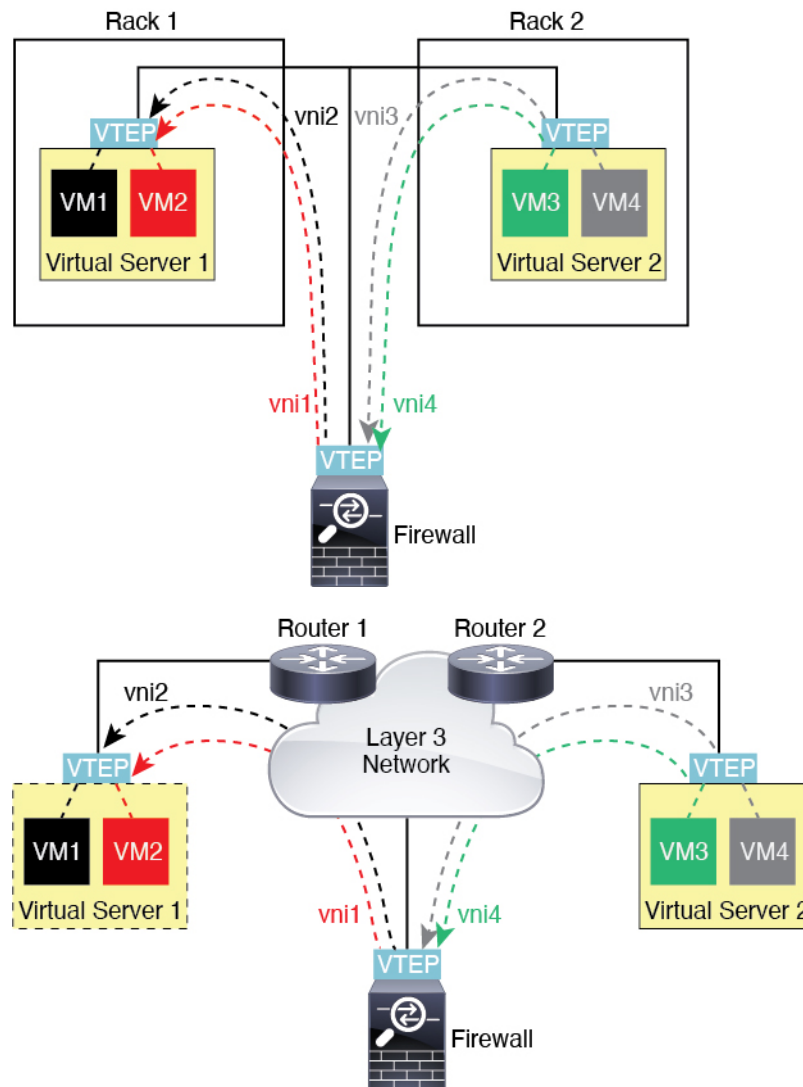
Threat Defense は、VXLAN ドメインと非 VXLAN ドメイン間のルータとして機能し、異なるネットワーク上のデバイスを接続します。

VXLAN ドメイン間のルータ



VXLAN ドメイン間のルータ

VXLAN 拡張 レイヤ 2 ドメインを使用すると、VM は、Threat Defense が同じラックにないとき、あるいは Threat Defense がレイヤ 3 ネットワーク上の離れた場所にあるときにそのゲートウェイとして Threat Defense を指し示すことができます。



このシナリオに関する次の注意事項を参照してください。

1. VM3 から VM1 へのパケットでは、Threat Defense がデフォルトゲートウェイであるため、宛先 MAC アドレスは Threat Defense の MAC アドレスです。
2. 仮想サーバー 2 の VTEP 送信元インターフェイスは、VM3 からパケットを受信してから、VNI 3 の VXLAN タグでパケットをカプセル化して Threat Defense に送信します。
3. Threat Defense は、パケットを受信すると、そのパケットをカプセル化解除して内部フレームを取得します。
4. Threat Defense は、ルート ルックアップに内部フレームを使用して、宛先が VNI 2 上であることを認識します。VM1 のマッピングがまだない場合、Threat Defense は、VNI 2 カプセル化された ARP ブロードキャストを VNI 2 のマルチキャストグループ IP で送信します。



(注) このシナリオでは複数の VTEP ピアがあるため、Threat Defense は、複数のダイナミック VTEP ピア ディスカバリを使用する必要があります。

5. Threat Defense は、VNI 2 の VXLAN タグでパケットを再度カプセル化し、仮想サーバ 1 に送信します。カプセル化の前に、Threat Defense は、内部フレームの宛先 MAC アドレスを変更して VM1 の MAC にします (Threat Defense で VM1 の MAC アドレスを取得するためにマルチキャストカプセル化 ARP が必要な場合があります)。
6. 仮想サーバー 1 は、VXLAN パケットを受信すると、パケットをカプセル化解除して内部フレームを VM1 に配信します。

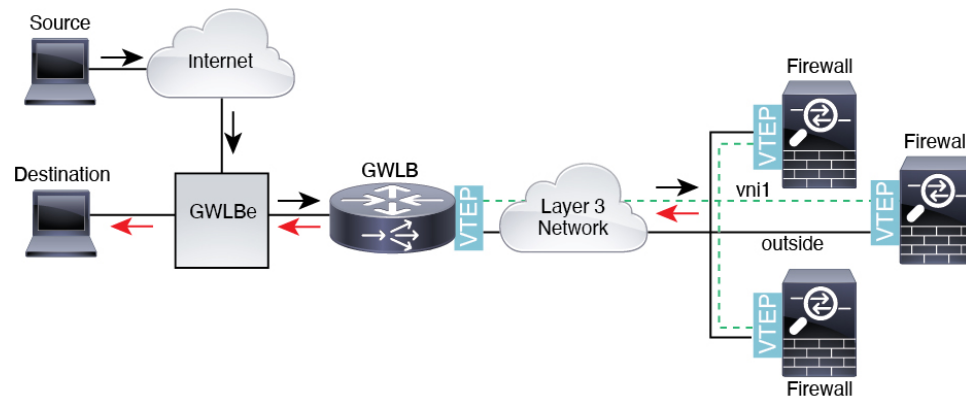
## Geneve シングルアームプロキシの使用例



(注) この使用例は、現在サポートされている Geneve インターフェイスの唯一の使用例です。

AWS ゲートウェイロードバランサは、透過的なネットワークゲートウェイと、トラフィックを分散し、仮想アプライアンスをオンデマンドで拡張するロードバランサを組み合わせます。Threat Defense Virtual は、分散データプレーン (ゲートウェイロードバランサエンドポイント) を備えたゲートウェイロードバランサ集中型コントロールプレーンをサポートします。次の図は、ゲートウェイロードバランサのエンドポイントからゲートウェイロードバランサに転送されるトラフィックを示しています。ゲートウェイロードバランサは、複数の Threat Defense Virtual の間でトラフィックのバランスをとり、トラフィックをドロップするか、ゲートウェイロードバランサに送り返す (Uターントラフィック) 前に検査します。ゲートウェイロードバランサは、トラフィックをゲートウェイロードバランサのエンドポイントと宛先に送り返します。

図 15: Geneve シングルアームプロキシ



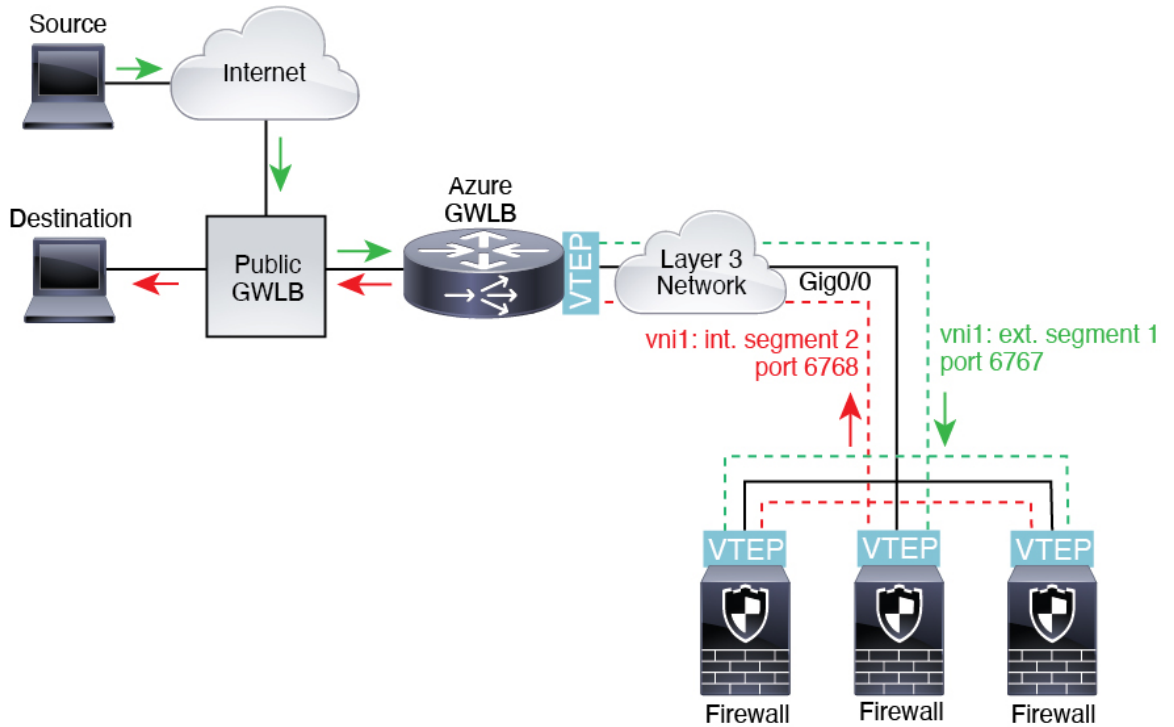
### Azure ゲートウェイロードバランサおよびペアプロキシ

Azure サービスチェーンでは、**Threat Defense Virtual** がインターネットと顧客サービス間のパケットをインターセプトできる透過的なゲートウェイとして機能します。**Threat Defense Virtual** は、ペアリングされたプロキシの **VXLAN** セグメントを利用して、単一の NIC に外部インターフェイスと内部インターフェイスを定義します。

次の図は、外部 **VXLAN** セグメント上のパブリックゲートウェイロードバランサから Azure ゲートウェイロードバランサに転送されるトラフィックを示しています。ゲートウェイロードバランサは、複数の **Threat Defense Virtual** の間でトラフィックのバランスをとり、トラフィックをドロップするか、外部 **VXLAN** セグメント上のゲートウェイロードバランサに送り返す前に検査します。Azure ゲートウェイロードバランサは、トラフィックをパブリックゲートウェイロードバランサと宛先に送り返します。



図 16: ペアリングされたプロキシを使用した Azure Gateway ロードバランサ



## VXLAN インターフェイスの要件と前提条件

### モデルの要件

- VXLAN カプセル化は、すべてのモデルでサポートされます。
- Geneve カプセル化は、次のモデルでサポートされます。
  - Amazon Web Services (AWS) の Threat Defense Virtual
- ペアプロキシモードの VXLAN は、次のモデルでサポートされています。
  - Azure の Threat Defense Virtual
- Firepower 1010 : スイッチポートおよび VLAN インターフェイスは、VTEP インターフェイスとしてサポートされていません。

# VXLAN インターフェイスのガイドライン

## ファイアウォールモード

- Geneve インターフェイスは、ルーテッドファイアウォールモードでのみサポートされています。
- ペアプロキシの VXLAN インターフェイスは、ルーテッドファイアウォールモードでのみサポートされています。

## IPv6

- VNI インターフェイスは、IPv4 と IPv6 の両方のトラフィックをサポートします。
  - VXLAN カプセル化の場合、VTEP 送信元インターフェイスは IPv4 と IPv6 の両方をサポートします。Threat Defense Virtual クラスタ制御リンクの VTEP 送信元インターフェイスは、IPv4 のみをサポートします。
- Geneve の場合、VTEP 送信元インターフェイスは IPv4 のみをサポートします。

## クラスタ

- クラスタリングは、クラスタ制御リンク（Threat Defense Virtual のみ）を除いて、個別インターフェイスモードの VXLAN をサポートしていません。スパンド EtherChannel モードだけが VXLAN をサポートしています。

GWLB で使用する追加の Geneve インターフェイスを使用できる AWS と、GWLB で使用する追加のペアプロキシの VXLAN インターフェイスを使用できる Azure の場合は例外です。

## Routing

- VNI インターフェイスでは、スタティックルーティングまたはポリシーベースルーティングのみをサポートします。ダイナミックルーティングプロトコルはサポートされません。

## MTU

- VXLAN カプセル化：送信元インターフェイスの MTU が 1,554 バイト（IPv4 の場合）または 1,574 バイト（IPv6 の場合）未満の場合、Threat Defense は自動的に MTU を 1,554 バイトまたは 1,574 バイトに増やします。この場合、イーサネットデータグラム全体がカプセル化されるため、新しいパケットのサイズが大きくなるため、より大きな MTU が必要になります。他のデバイスが使用する MTU の方が大きい場合、送信元インターフェイス MTU を、ネットワーク MTU + 54 バイト（IPv4 の場合）または + 64 バイト（IPv6 の場合）に設定する必要があります。Threat Defense Virtual の場合、この MTU は、ジャンボフレーム予約を有効にするためにリスタートする必要があります。

- Geneve カプセル化：送信元インターフェイスの MTU が 1,806 バイト未満の場合、Threat Defense は自動的に MTU を 1,806 バイトに増やします。この場合、イーサネット データグラム全体がカプセル化されるため、新しいパケットのサイズが大きくなるため、より大きな MTU が必要になります。他のデバイスが使用する MTU の方が大きい場合、送信元インターフェイス MTU を、ネットワーク MTU + 306 バイトに設定する必要があります。この MTU は、ジャンボフレーム予約を有効にするためにリスタートする必要があります。

## VXLAN または Geneve インターフェイスの設定

VXLAN または Geneve インターフェイスを設定できます。

### VXLAN インターフェイスの設定

VXLAN を設定するには、次の手順を実行します。



- (注) VXLAN または Geneve を設定できます (Threat Defense Virtual のみ)。Geneve インターフェイスについては、[Geneve インターフェイスの設定 \(38 ページ\)](#) を参照してください。




- (注) Azure GWLB の場合、ARM テンプレートを使用して VM を展開するときに、VXLAN インターフェイスが設定されます。このセクションを使用して、設定を変更できます。

1. [VTEP 送信元インターフェイスの設定 \(35 ページ\)](#)。
2. [VNI インターフェイスの設定 \(37 ページ\)](#)。
3. (Azure GWLB) [ゲートウェイロードバランサのヘルスチェックの許可 \(40 ページ\)](#)。

### VTEP 送信元インターフェイスの設定

Threat Defense デバイスごとに 1 つの VTEP 送信元インターフェイスを設定できます。VTEP は、ネットワーク仮想化エンドポイント (NVE) として定義されます。VXLAN は、デフォルトのカプセル化タイプです。Azure の Threat Defense Virtual でのクラスタリングには例外があり、1 つの VTEP ソースインターフェイスをクラスタ制御リンクに使用し、2 つ目のソースインターフェイスを Azure GWLB に接続されたデータインターフェイスに使用できます。

#### 手順

- ステップ 1 ピア VTEP のグループを指定する場合は、ピア IP アドレスを持つネットワークオブジェクトを追加します。[ネットワーク オブジェクトの作成](#) を参照してください。
- ステップ 2 [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] の順に選択します。
- ステップ 3 VXLAN を設定するデバイスの横にある [編集 (Edit)] () をクリックします。

**ステップ 4** (任意) 送信元インターフェイスが NVE 専用であることを指定します。

ルーテッドモードでは、この設定はオプションです。設定した場合、トラフィックはこのインターフェイスの VXLAN および共通の管理トラフィックのみに制限されます。トランスペアレントファイアウォールモードでは、この設定は自動的に有効になります。

- a) [インターフェイス (Interfaces) ] をクリックします。
- b) VTEP 送信元インターフェイスの [編集 (Edit) ] (✎) をクリックします。
- c) [全般 (General) ] ページで、[NVEのみ (NVE Only) ] チェックボックスをオンにします。

**ステップ 5** まだ表示されていない場合は、[VTEP] をクリックします。

**ステップ 6** [NVEの有効化 (Enable NVE) ] をオンにします。

**ステップ 7** [VTEPの追加 (Add VTEP) ] をクリックします。

**ステップ 8** [カプセル化タイプ (Encapsulation Type) ] で、[VxLAN] を選択します。

AWS の場合、[VxLAN] と [Geneve] のどちらかを選択できます。他のプラットフォームでは、[VxLAN] が自動的に選択されます。

**ステップ 9** [カプセル化ポート (Encapsulation port) ] に指定された範囲内で値を入力します。

デフォルト値は 4789 です。

**ステップ 10** [VTEP送信元インターフェイス (VTEP Source Interface) ] を選択します。

デバイス上にある使用可能な物理インターフェイスのリストから選択します。送信元インターフェイスの MTU が 1554 バイト (IPv4 の場合) または 1574 バイト (IPv6 の場合) 未満の場合、Management Center は自動的に MTU を 1554 バイトまたは 1574 バイトに増やします。

**ステップ 11** [ネイバーアドレス (Neighbor Address) ] を選択します。次のオプションを使用できます。

- [なし (None) ] : ネイバーアドレスを指定しません。
- [ピアVTEP (Peer VTEP) ] : ピア VTEP アドレスを指定します。
- [ピアグループ (Peer Group) ] : ピア IP アドレスを持つネットワークオブジェクトを指定します。
- [デフォルトマルチキャスト (Default Multicast) ] : 関連するすべての VNI インターフェイスのデフォルトマルチキャストグループを指定します。VNI インターフェイスごとにマルチキャストグループを設定していない場合は、このグループが使用されます。その VNI インターフェイスレベルでグループを設定している場合は、そのグループがこの設定よりも優先されます。

**ステップ 12** [OK] をクリックします。

**ステップ 13** [保存 (Save) ] をクリックします。

**ステップ 14** ルーテッドインターフェイスのパラメータを設定します。「[ルーテッドモードのインターフェイスの設定](#)」を参照してください。

## VNI インターフェイスの設定

VNI インターフェイスを追加してそれを VTEP 送信元インターフェイスに関連付けて、基本インターフェイス パラメータを設定します。

Azure Threat Defense Virtual の場合、通常の VXLAN インターフェイスを設定するか、Azure GWLB で使用するペアプロキシモードの VXLAN インターフェイスを設定できます。ペアプロキシモードは、クラスタリングでサポートされる唯一のモードです。

### 手順

- ステップ 1 [デバイス (Devices) ] > [デバイス管理 (Device Management) ] の順に選択します。
- ステップ 2 VXLAN を設定するデバイスの横にある [編集 (Edit) ] (✎) をクリックします。
- ステップ 3 [インターフェイス (Interfaces) ] をクリックします。
- ステップ 4 [インターフェイスの追加 (Add Interfaces) ] をクリックし、[VNI インターフェイス (VNI Interface) ] を選択します。
- ステップ 5 [名前 (Name) ] と [説明 (Description) ] にインターフェイスの名前と説明をそれぞれ入力します。
- ステップ 6 [セキュリティゾーン (Security Zone) ] ドロップダウンリストからセキュリティゾーンを選択するか、[新規 (New) ] をクリックして、新しいセキュリティゾーンを追加します。
- ステップ 7 指定された範囲内で、[優先度 (Priority) ] フィールドの値を入力します。デフォルトでは、0 が選択されています。
- ステップ 8 [VNI ID] には 1 ~ 10000 の間で値を入力します。  
この ID は内部インターフェイス識別子です。
- ステップ 9 (Azure GWLB のペアプロキシ VXLAN) プロキシペアモードを有効にして、必要なパラメータを設定します。
  - a) プロキシのペアリングを確認します。
  - b) 内部ポートを 1024 ~ 65535 に設定します。
  - c) 内部セグメント ID を 1 ~ 16777215 の範囲で設定します。
  - d) 外部ポートを 1024 ~ 65535 に設定します。
  - e) 外部セグメント ID を 1 ~ 16777215 の範囲で設定します。
- ステップ 10 (通常の VXLAN) [VNIセグメントID (VNI Segment ID) ] には 1 ~ 16777215 の間の値を入力します。  
セグメント ID は VXLAN タギングに使用されます。
- ステップ 11 [マルチキャストグループアドレス (Multicast Group IP Address) ] を入力します。  
VNI インターフェイスに対してマルチキャストグループを設定しない場合は、VTEP 送信元インターフェイス設定のデフォルトグループが使用されます (使用可能な場合)。VTEP 送信元インターフェイスに対して手動で VTEP ピア IP を設定した場合、VNI インターフェイスに対してマルチキャストグループを指定することはできません。

**ステップ 12** [VTEPインターフェイスにマッピングされているNVE (NVE Mapped to VTEP Interface) ]をオンにします。

このオプションにより、インターフェイスがVTEP送信元インターフェイスに関連付けられます。

**ステップ 13** [OK] をクリックします。

**ステップ 14** [保存 (Save) ] をクリックして、インターフェイス設定を保存します。

**ステップ 15** ルーテッドまたはトランスペアレントインターフェイスのパラメータを設定します。[ルーテッドモードとトランスペアレントモードのインターフェイスの設定 \(41 ページ\)](#) を参照してください。

## Geneve インターフェイスの設定

Threat Defense Virtual の Geneve インターフェイスを設定するには、次の手順を実行します。



(注) VXLAN または Geneve を設定できます。VXLAN インターフェイスについては、[VXLAN インターフェイスの設定 \(35 ページ\)](#) を参照してください。


1. [VTEP 送信元インターフェイスの設定 \(38 ページ\)](#)。
2. [VNI インターフェイスの設定 \(39 ページ\)](#)。
3. [ゲートウェイロードバランサのヘルスチェックの許可 \(40 ページ\)](#)。

### VTEP 送信元インターフェイスの設定

Threat Defense Virtual デバイスごとに 1 つの VTEP 送信元インターフェイスを設定できます。VTEP は、ネットワーク仮想化エンドポイント (NVE) として定義されます。

#### 手順

**ステップ 1** [デバイス (Devices) ] > [デバイス管理 (Device Management) ] の順に選択します。

**ステップ 2** Geneve を設定するデバイスの横にある [編集 (Edit) ] (  ) をクリックします。

**ステップ 3** [VTEP] をクリックします。

**ステップ 4** [NVEの有効化 (Enable NVE) ] をオンにします。

**ステップ 5** [VTEPの追加 (Add VTEP) ] をクリックします。

**ステップ 6** [カプセル化タイプ (Encapsulation Type) ] で、[Geneve] を選択します。

**ステップ 7** [カプセル化ポート (Encapsulation port) ] に指定された範囲内で値を入力します。

[Geneveポート (Geneve Port) ] を変更することは推奨しません。AWS にはポート 6081 が必要です。

- ステップ 8** [VTEP送信元インターフェイス (VTEP Source Interface)] を選択します。
- デバイス上にある使用可能な物理インターフェイスのリストから選択できます。送信元インターフェイスの MTU が 1806 バイト未満の場合、Management Center は自動的に MTU を 1806 バイトに増やします。
- ステップ 9** [OK] をクリックします。
- ステップ 10** [保存 (Save)] をクリックします。
- ステップ 11** ルーテッドインターフェイスのパラメータを設定します。「[ルーテッドモードのインターフェイスの設定](#)」を参照してください。

## VNI インターフェイスの設定

VNI インターフェイスを追加してそれを VTEP 送信元インターフェイスに関連付けて、基本インターフェイス パラメータを設定します。

### 手順

- ステップ 1** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] の順に選択します。
- ステップ 2** Geneve を設定するデバイスの横にある [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。
- ステップ 3** [インターフェイス (Interfaces)] をクリックします。
- ステップ 4** [インターフェイスの追加 (Add Interfaces)] をクリックし、[VNI インターフェイス (VNI Interface)] を選択します。
- ステップ 5** [名前 (Name)] と [説明 (Description)] にインターフェイスの名前と説明をそれぞれ入力します。
- ステップ 6** [VNI ID] には 1 ~ 10000 の間で値を入力します。
- この ID は内部インターフェイス識別子です。
- ステップ 7** [プロキシを有効にする (Enable Proxy)] をオンにします。
- このオプションにより、シングルアームプロキシが有効になり、トラフィックは入ったときと同じインターフェイスから出ることができます (Uターントラフィック)。後でインターフェイスを編集する場合、シングルアームプロキシを無効にすることはできません。無効にするには、既存のインターフェイスを削除して、新しい VNI インターフェイスを作成する必要があります。
- このオプションは、Geneve VTEP でのみ使用できます。
- ステップ 8** [VTEP インターフェイスにマッピングされている NVE (NVE Mapped to VTEP Interface)] を選択します。
- このオプションにより、インターフェイスが VTEP 送信元インターフェイスに関連付けられます。
- ステップ 9** [OK] をクリックします。

**ステップ 10** [保存 (Save) ]をクリックして、インターフェイス設定を保存します。

**ステップ 11** ルーテッドインターフェイスのパラメータを設定します。「[ルーテッドモードのインターフェイスの設定](#)」を参照してください。

## ゲートウェイロードバランサのヘルスチェックの許可

AWS または Azure GWLB では、アプライアンスがヘルスチェックに正しく応答する必要があります。GWLBは、正常と見なされるアプライアンスにのみトラフィックを送信します。SSH、HTTP、または HTTPS のヘルスチェックに応答するように Threat Defense Virtual を設定する必要があります。

次のいずれかの方法を設定します。

### 手順

**ステップ 1** SSH を設定します。「[セキュアシェルの設定](#)」を参照してください。

GWLB IP アドレスからの SSH を許可します。GWLB は、Threat Defense Virtual への接続の確立を試行し、ログインの Threat Defense Virtual のプロンプトが正常性の証拠として取得されます。SSH ログインの試行は1分後にタイムアウトします。このタイムアウトに対応するには、GWLB でより長いヘルスチェック間隔を設定する必要があります。

**ステップ 2** ポート変換機能を備えたスタティック インターフェイス NAT を使用した HTTP(S) リダイレクトの設定

ヘルスチェックをメタデータ HTTP(S) サーバーにリダイレクトするように Threat Defense Virtual を設定できます。HTTP (S) ヘルスチェックの場合、HTTP (S) サーバーは 200 ~ 399 の範囲のステータスコードで GWLB に応答する必要があります。Threat Defense Virtual では同時管理接続の数に制限があるため、ヘルスチェックを外部サーバーにオフロードすることもできます。

ポート変換を設定したスタティック インターフェイス NAT を使用すると、ポート（ポート 80 など）への接続を別の IP アドレスにリダイレクトできます。たとえば、Threat Defense Virtual 外部インターフェイスの宛先を持つ GWLB からの HTTP パケットを、HTTP サーバーの宛先を持つ Threat Defense Virtual 外部インターフェイスからのように変換します。次に Threat Defense Virtual はパケットをマッピングされた宛先アドレスに転送します。HTTP サーバーは Threat Defense Virtual 外部インターフェイスに応答し、Threat Defense Virtual は GWLB に応答を転送します。GWLB から HTTP サーバーへのトラフィックを許可するアクセスルールが必要です。

- GWLB ネットワークから送られた外部インターフェイスの HTTP(S) トラフィックをアクセスルールで許可します。[アクセスコントロールルール](#)を参照してください。
- HTTP(S) の場合、送信元 GWLB の IP アドレスを Threat Defense Virtual 外部インターフェイスの IP アドレスに変換します。次に、外部インターフェイスの IP アドレスの宛先を



HTTP(S) サーバーの IP アドレスに変換します。 [スタティック手動 NAT の設定](#) を参照してください。

## ルーテッドモードとトランスペアレントモードのインターフェイスの設定

この項では、ルーテッドファイアウォールモードおよびトランスペアレントファイアウォールモードで、すべてのモデルに対応する標準のインターフェイス設定を完了するためのタスクについて説明します。

### ルーテッドモードインターフェイスとトランスペアレントモードインターフェイスについて

ファイアウォールモードのインターフェイスでは、トラフィックが、フローの維持、IP レイヤおよび TCP レイヤの両方でのフロー状態の追跡、IP 最適化、TCP の正規化などのファイアウォール機能の対象となります。オプションで、セキュリティポリシーに従ってこのトラフィックに IPS 機能を設定することもできます。

設定できるファイアウォールインターフェイスのタイプは、ルーテッドモードとトランスペアレントモードのどちらのファイアウォールモードがそのデバイスに設定されているかによって異なります。詳細については、[トランスペアレントファイアウォールモードまたはルーテッドファイアウォールモード](#)を参照してください。

- ルーテッドモードインターフェイス（ルーテッドファイアウォールモードのみ）：ルーティングを行う各インターフェイスは異なるサブネット上にあります。
- ブリッジグループインターフェイス（ルーテッドおよびトランスペアレントファイアウォールモード）：複数のインターフェイスをネットワーク上でグループ化することができ、Firepower Threat Defense デバイスはブリッジング技術を使用してインターフェイス間のトラフィックを通過させることができます。各ブリッジグループには、ネットワーク上で IP アドレスが割り当てられるブリッジ仮想インターフェイス（BVI）が含まれます。ルーテッドモードでは、Threat Defense デバイスは BVI と通常のルーテッドインターフェイス間をルーティングします。トランスペアレントモードでは、各ブリッジグループは分離されていて、相互通信できません。

### デュアル IP スタック（IPv4 および IPv6）

Threat Defense デバイスは、インターフェイスで IPv6 アドレスと IPv4 アドレスの両方をサポートしています。IPv4 と IPv6 の両方で、デフォルトルートを設定してください。

## 31 ビットサブネットマスク

ルーテッドインターフェイスに関しては、ポイントツーポイント接続向けの 31 ビットのサブネットに IP アドレスを設定できます。31 ビットサブネットには 2 つのアドレスのみが含まれます。通常、サブネットの最初と最後のアドレスはネットワーク用とブロードキャスト用に予約されており、2 アドレスサブネットは使用できません。ただし、ポイントツーポイント接続があり、ネットワークアドレスやブロードキャストアドレスが不要な場合は、IPv4 形式でアドレスを保持するのに 31 サブネットビットが役立ちます。たとえば、2 つの Threat Defense 間のフェールオーバーリンクに必要なアドレスは 2 つだけです。リンクの一方の側から送信されるパケットはすべてもう一方の側で受信され、ブロードキャストは必要ありません。また、SNMP または Syslog を実行する管理ステーションを直接接続することもできます。

### 31 ビットのサブネットとクラスタリング

管理インターフェイスとクラスタ制御リンクを除き、クラスタインターフェイスの 31 ビットのサブネットマスクを使用できます。

### 31 ビットのサブネットとフェールオーバー

フェールオーバーに関しては、Threat Defense インターフェイスの IP アドレスに 31 ビットのサブネットを使用した場合、アドレスが不足しているため、インターフェイス用のスタンバイ IP アドレスは設定できません。通常、アクティブなユニットがインターフェイスのテストを実行し、スタンバイのインターフェイスの健全性を保証できるよう、フェールオーバーインターフェイスはスタンバイ IP アドレスを必要とします。スタンバイ IP アドレスがないと、Threat Defense はネットワークのテストを実行できず、リンクステートのみしか追跡できません。

ポイントツーポイント接続であるフェールオーバーと任意のステートリンクでは、31 ビットのサブネットも使用できます。

### 31 ビットのサブネットと管理

直接接続される管理ステーションがあれば、Threat Defense 上で SSH または HTTP にポイントツーポイント接続を、または管理ステーション上で SNMP または Syslog にポイントツーポイント接続をそれぞれ使用できます。

### 31 ビットのサブネットをサポートしていない機能

次の機能は、31 ビットのサブネットをサポートしていません。

- ブリッジグループ用 BVI インターフェイス-ブリッジグループには BVI、2 つのブリッジグループメンバーに接続された 2 つのホスト用に、少なくとも 3 つのホストアドレスが必要です。/29 サブネット以下を使用する必要があります。
- マルチキャストルーティング

# ルーテッドモードおよびトランスペアレントモードのインターフェイスに関するガイドラインと制限事項

## 高可用性、クラスタリング、およびマルチインスタンス

- フェールオーバー リンクは、この章の手順で設定しないでください。詳細については、「高可用性」の章を参照してください。
- クラスタインターフェイスの場合は、クラスタリングの章で要件を確認してください。
- マルチインスタンスモードの場合、共有インターフェイスはブリッジ グループ メンバー インターフェイス（トランスペアレントモードまたはルーテッドモード）ではサポートされません。
- 高可用性を使用する場合、データ インターフェイスの IP アドレスとスタンバイアドレスを手動で設定する必要があります。DHCP および PPPoE はサポートされません。[**モニター対象インターフェイス (Monitored Interfaces)**] 領域の [**デバイス (Devices)**] > [**デバイス管理 (Device Management)**] > [**高可用性 (High Availability)**] タブで、スタンバイ IP アドレスを設定します。詳細については、高可用性の章も参照してください。

## IPv6

- IPv6 はすべてのインターフェイスでサポートされます。
- トランスペアレント モードでは、IPv6 アドレスは手動でのみ設定できます。
- Threat Defense デバイスは、IPv6 エニーキャスト アドレスはサポートしません。
- DHCPv6 およびプレフィックス委任オプションは、トランスペアレントモード、クラスタリング、または 高可用性 ではサポートされません。

## モデルのガイドライン

- ブリッジされた ixgbevf インターフェイスを持つ VMware 上の Threat Defense Virtual では、のブリッジグループはサポートされません。
- FirePOWER 2100 シリーズでは、ルーテッドモードのブリッジグループはサポートされません。

## トランスペアレントモードとブリッジグループのガイドライン

- 64 のインターフェイスをもつブリッジグループを 250 まで作成できます。
- 直接接続された各ネットワークは同一のサブネット上にある必要があります。
- Threat Defense デバイス では、セカンダリ ネットワーク上のトラフィックはサポートされていません。BVI IP アドレスと同じネットワーク上のトラフィックだけがサポートされています。

- デバイスとデバイス間の管理トラフィック、および Threat Defense デバイス を通過するデータトラフィックの各ブリッジグループに対し、BVI の IP アドレスが必要です。IPv4 トラフィックの場合は、IPv4 アドレスを指定します。IPv6 トラフィックの場合は、IPv6 アドレスを指定します。
- IPv6 アドレスは手動でのみ設定できます。
- BVI IP アドレスは、接続されたネットワークと同じサブネット内にある必要があります。サブネットにホストサブネット (255.255.255.255) を設定することはできません。
- 管理インターフェイスはブリッジグループのメンバーとしてサポートされません。
- マルチインスタンスモードの場合、共有インターフェイスはブリッジグループメンバーインターフェイス (トランスペアレントモードまたはルーテッドモード) ではサポートされません。
- ブリッジされた ixgbevf インターフェイスを備えた VMware の Threat Defense Virtual の場合、トランスペアレントモードはサポートされておらず、ブリッジグループはルーテッドモードではサポートされていません。
- Firepower 2100 シリーズ では、ルーテッドモードのブリッジグループはサポートされません。
- Firepower 1010 では、同じブリッジグループ内に論理 VLAN インターフェイスと物理ファイアウォールインターフェイスを混在させることはできません。
- Firepower 4100/9300 では、データ共有インターフェイスはブリッジグループのメンバーとしてサポートされません。
- トランスペアレントモードでは、少なくとも 1 つのブリッジグループを使用し、データインターフェイスがブリッジグループに属している必要があります。
- トランスペアレントモードでは、接続されたデバイス用のデフォルトゲートウェイとして BVI IP アドレスを指定しないでください。デバイスは Threat Defense の他方側のルータをデフォルトゲートウェイとして指定する必要があります。
- トランスペアレントモードでは、管理トラフィックの戻りパスを指定するために必要なデフォルトルートは、1 つのブリッジグループネットワークからの管理トラフィックにだけ適用されます。これは、デフォルトルートはブリッジグループのインターフェイスとブリッジグループネットワークのルータ IP アドレスを指定しますが、ユーザは 1 つのデフォルトルートしか定義できないためです。複数のブリッジグループネットワークからの管理トラフィックが存在する場合は、管理トラフィックの発信元ネットワークを識別する標準のスタティックルートを指定する必要があります。
- 透過モードは、Amazon Web Services、Microsoft Azure、Google Cloud Platform、および Oracle Cloud Infrastructure にデプロイされた脅威防御仮想インスタンスではサポートされていません。
- ルーテッドモードでは、ブリッジグループと他のルーテッドインターフェイスの間をルーティングするために、BVI を指定する必要があります。

- ルーテッドモードでは、Threat Defense 定義の EtherChannel インターフェイスがブリッジグループのメンバーとしてサポートされません。Firepower 4100/9300 上の Etherchannel は、ブリッジグループメンバーにすることができます。
- Bidirectional Forwarding Detection (BFD) エコーパケットは、ブリッジグループメンバーを使用するときに、Threat Defense を介して許可されません。BFD を実行している Threat Defense の両側に 2 つのネイバーがある場合、Threat Defense は BFD エコーパケットをドロップします。両方が同じ送信元および宛先 IP アドレスを持ち、LAND 攻撃の一部であるように見えるからです。

#### その他のガイドラインと要件

- Threat Defense では、ファイアウォールインターフェイスについては、パケットで 802.1Q ヘッダーが 1 つだけサポートされ、複数のヘッダー (Q-in-Q) はサポートされません。  
注：インラインセットとパッシブインターフェイスについては、FTD で Q-in-Q がサポートされ、パケットで 802.1Q ヘッダーが 2 つまでサポートされます。ただし、Firepower 4100/9300 は例外で、802.1Q ヘッダーは 1 つだけサポートされます。

## ルーテッドモードのインターフェイスの設定

この手順では、名前、セキュリティゾーン、および IPv4 アドレスを設定する方法について説明します。



- (注) すべてのインターフェイスタイプですべてのフィールドがサポートされているわけではありません。

#### 始める前に

- **Firepower 4100/9300**
  1. [物理インターフェイスの設定](#)
  2. (任意) 特別なインターフェイスを設定します。
    - [EtherChannel \(ポートチャネル\) の追加](#)
    - [コンテナインスタンスの VLAN サブインターフェイスの追加](#) FXOS で次を実行します。
    - [ループバックインターフェイスの設定 \(15 ページ\)](#)
    - [Management Center でのサブインターフェイスの追加 \(22 ページ\)](#)
    - [VXLAN インターフェイスの設定 \(35 ページ\)](#)
- (任意) 他のすべてのモデル :

- [EtherChannel の設定](#)
- [ループバック インターフェイスの設定 \(15 ページ\)](#)
- [サブインターフェイスの追加 \(22 ページ\)](#)
- [VXLAN インターフェイスの設定 \(35 ページ\)](#)
- [AWS 上の Threat Defense Virtual : Geneve インターフェイスの設定 \(38 ページ\)](#)
- [Firepower 1010 : VLAN インターフェイスの設定 \(6 ページ\)](#)

## 手順

- ステップ 1** [デバイス (Devices) ]>[デバイス管理 (Device Management) ]を選択し、Threat Defense デバイス[編集 (Edit) ] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces) ]タブがデフォルトで選択されます。
- ステップ 2** 編集するインターフェイス [編集 (Edit) ] (✎) をクリックします。
- ステップ 3** [名前 (Name) ]フィールドに、48 文字以内で名前を入力します。
- この名前を「cluster」という語句で始めることはできません。その名前は内部で使用するために予約されています。
- ステップ 4** [有効 (Enabled) ]チェック ボックスをオンにして、インターフェイスを有効化します。
- ステップ 5** (任意) このインターフェイスを [管理専用 (Management Only) ]に設定してトラフィックを管理トラフィックに制限します。through-the-box トラフィックは許可されていません。
- ステップ 6** (任意) [Description] フィールドに説明を追加します。
- 説明は 200 文字以内で、改行を入れずに 1 行で入力します。
- ステップ 7** [モード (Mode) ]ドロップダウンリストで、[なし (None) ]を選択します。
- 通常のファイアウォールインターフェイスのモードは [なし (None) ]に設定されています。他のモードは IPS 専用インターフェイスタイプ向けです。
- ステップ 8** [セキュリティ ゾーン (Security Zone) ]ドロップダウンリストからセキュリティゾーンを選択するか、[新規 (New) ]をクリックして、新しいセキュリティゾーンを追加します。
- ルーテッドインターフェイスは、ルーテッドタイプインターフェイスであり、ルーテッドタイプのゾーンにのみ属することができます。
- ステップ 9** MTU については[MTU の設定 \(76 ページ\)](#) を参照してください。
- ステップ 10** [優先度 (Priority) ]フィールドに、0 ~ 65535 の範囲の数値を入力します。
- この値は、ポリシーベースのルーティング構成で使用されます。優先度は、複数の出力インターフェイス間でトラフィックをルーティングする方法を決定するために使用されます。詳細については、「[ポリシーベース ルーティング ポリシーの設定](#)」を参照してください。

**ステップ 11** [IPv4] タブをクリックします。IP アドレスを設定するには、[IP タイプ (IP Type)] ドロップダウンリストにある次のオプションのいずれかを使用します。

高可用性、クラスタリング、およびループバック インターフェイスは、静的 IP アドレス構成のみをサポートします。DHCP および PPPoE はサポートされていません。

- [静的 IP を使用する (Use Static IP)] : IP アドレスおよびサブネットマスクを入力します。ポイントツーポイント接続の場合、31 ビットのサブネットマスク (255.255.255.254 または /31) を指定できます。この場合、ネットワークまたはブロードキャストアドレス用の IP アドレスは予約されません。この場合、スタンバイ IP アドレスを設定できません。高可用性の場合は、静的 IP アドレスのみを使用できます。[モニター対象インターフェイス (Monitored Interfaces)] エリアの [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [ハイアベイラビリティ (High Availability)] タブで、スタンバイ IP アドレスを設定します。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブユニットはネットワークテストを使用してスタンバイインターフェイスをモニターできず、リンクステータスをトラッキングすることしかできません。
- [DHCP の使用 (Use DHCP)] : 次のオプションのパラメータを設定します。
  - [DHCP を使用してデフォルトルートを取得 (Obtain default route using DHCP)] : DHCP サーバーからデフォルトルートを取得します。
  - [DHCP ルートメトリック (DHCP route metric)] : アドミニストレーティブディスタンスを学習したルートに割り当てます (1 ~ 255)。学習したルートのデフォルトのアドミニストレーティブディスタンスは 1 です。
- [PPPoE を使用 (Use PPPoE)] : インターフェイスが DSL、ケーブルモデム、またはその他の手段で ISP に接続されていて、ISP が PPPoE を使用して IP アドレスを割り当てる場合は、次のパラメータを設定します。
  - [VPDN グループ名 (VPDN Group Name)] : この接続を表すために選択するグループ名を指定します。
  - [PPPoE ユーザ名 (PPPoE User Name)] : ISP によって提供されたユーザ名を指定します。
  - [PPPoE パスワード/パスワードの確認 (PPPoE Password/Confirm Password)] : ISP によって提供されたパスワードを指定し、確認します。
  - [PPP 認証 (PPP Authentication)] : [PAP]、[CHAP]、または [MSCHAP] を選択します。

PAP は認証時にクリアテキストのユーザ名とパスワードを渡すため、セキュアではありません。CHAP では、サーバーのチャレンジに対して、クライアントは暗号化された「チャレンジとパスワード」およびクリアテキストのユーザ名を返します。CHAP は PAP よりセキュアですが、データを暗号化しません。MSCHAP は CHAP に似ていますが、サーバーが CHAP のようにクリアテキストパスワードを扱わず、暗号化されたパスワードだけを保存、比較するため、CHAP よりセキュアです。また、MSCHAP では MPPE によるデータの暗号化のためのキーを生成します。

- [PPPoE ルート メトリック (PPPoE route metric) ] : アドミニストレーティブ ディスタンスを学習したルートに割り当てます。有効な値は 1 ~ 255 です。デフォルトでは、学習したルートのアドミニストレーティブ ディスタンスは 1 です。
- [ルート設定の有効化 (Enable Route Settings) ] : 手動で PPPoE の IP アドレスを設定するには、このチェックボックスをオンにして、[IP アドレス (IP Address) ] を入力します。

[ルート設定を有効化 (Enable Route Settings) ] チェックボックスをオンにして、[IP アドレス (IP Address) ] を空欄にした場合、**ip address pppoe setroute** コマンドが次のように適用されます。

```
interface GigabitEthernet0/2
nameif inside2_pppoe
cts manual
  propagate sgt preserve-untag
  policy static sgt disabled trusted
security-level 0
pppoe client vpdn group test
pppoe client route distance 10
ip address pppoe setroute
```

- [フラッシュにユーザー名とパスワードを保存 (Store Username and Password in Flash) ] : フラッシュ メモリにユーザー名とパスワードを保存します。

Threat Defense デバイスは、NVRAM の特定の場所にユーザー名とパスワードを保存します。

- ステップ 12** (任意) [IPv6 アドレスの設定 \(56 ページ\)](#) を参照して [IPv6] タブでの IPv6 アドレスを設定します。
- ステップ 13** (任意) [MAC アドレスの設定 \(77 ページ\)](#) を参照して [詳細設定 (Advanced) ] タブで MAC アドレスを手動で設定します。
- ステップ 14** (任意) [ハードウェア構成 (Hardware Configuration) ] > [速度 (Speed) ] をクリックして、デュプレックスと速度を設定します。

- [デュプレックス (Duplex) ] : [全 (Full) ]、[半 (Half) ]、または [自動 (Auto) ] を選択します。SFP インターフェイスは [全二重 (Full) ] のみをサポートします。
- [速度 (Speed) ] : 速度を選択します (モデルによって異なります)。(Cisco Secure Firewall 3100/4200 のみ) [SFPを検出 (Detect SFP) ] を選択してインストールされている SFP モジュールの速度を検出し、適切な速度を使用します。デュプレックスは常に全二重で、自動ネゴシエーションは常に有効です。このオプションは、後でネットワークモジュールを別のモデルに変更し、速度を自動的に更新する場合に便利です。
- [自動ネゴシエーション (Auto-negotiation) ] : 速度、リンクステータス、およびフロー制御をネゴシエートするようにインターフェイスを設定します。
- [前方誤り訂正モード (Forward Error Correction Mode) ] : (Cisco Secure Firewall 3100/4200 のみ) 25 Gbps 以上のインターフェイスの場合は、前方誤り訂正 (FEC) を有効にします。EtherChannel メンバーインターフェイスの場合は、EtherChannel に追加する前に FEC を設



定する必要があります。自動を使用する場合に選択する設定は、トランシーバのタイプと、インターフェイスが固定（内蔵）かネットワークモジュールかによって異なります。

表 1: 自動設定のデフォルト FEC

トランシーバタイプ	固定ポートのデフォルト FEC (イーサネット 1/9 ~ 1/16)	ネットワークモジュールのデフォルト FEC
25G-SR	第 108 条 RS-FEC	第 108 条 RS-FEC
25G-LR	第 108 条 RS-FEC	第 108 条 RS-FEC
10/25G-CSR	第 108 条 RS-FEC	第 74 条 FC-FEC
25G-AOCxM	第 74 条 FC-FEC	第 74 条 FC-FEC
25G-CU2.5/3M	自動ネゴシエーション	自動ネゴシエーション
25G-CU4/5M	自動ネゴシエーション	自動ネゴシエーション
25/50/100G	第 91 条 RS-FEC	第 91 条 RS-FEC

**ステップ 15** (任意) [マネージャアクセス (Manager Access)] ページのデータインターフェイスで Management Center 管理アクセスを有効にします。

Threat Defense を最初にセットアップするときに、データインターフェイスからマネージャアクセスを有効にできます。Threat Defense を Management Center に追加した後にマネージャアクセスを有効または無効にする場合は、次を参照してください。

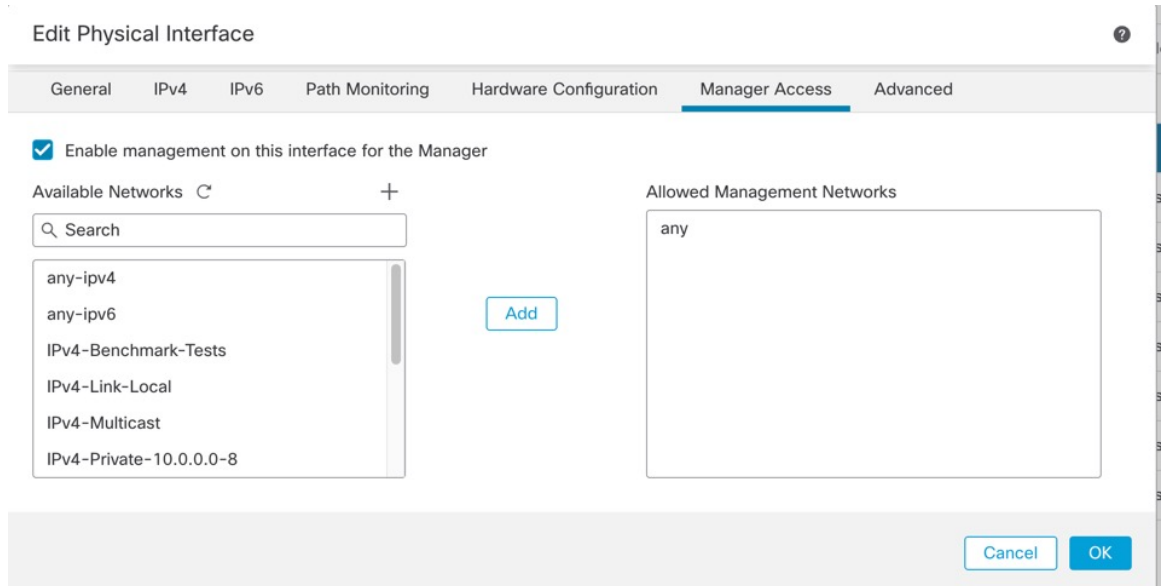
- マネージャアクセスの有効化：[管理アクセスインターフェイスの管理からデータへの変更](#)
  - (注) 管理インターフェイスからデータインターフェイスへのマネージャアクセスの移行を最初に開始しないと、マネージャアクセスを有効にすることはできません。移行を開始したら、[マネージャアクセス (Manager Access)] ページでマネージャアクセスを有効にし、設定を保存できます。
- マネージャアクセスの無効化：[マネージャアクセスインターフェイスをデータから管理に変更する](#)

マネージャアクセスインターフェイスをあるデータインターフェイスから別のデータインターフェイスに変更する場合は、元のデータインターフェイスでマネージャアクセスを無効にする必要がありますが、インターフェイス自体はまだ無効にしないでください。展開を実行するには、元のデータインターフェイスを使用する必要があります。新しいマネージャアクセスインターフェイスで同じ IP アドレスを使用する場合は、元のインターフェイスの IP 設定を削除または変更できます。この変更は展開に影響しません。新しいインターフェイスに別の IP アドレスを使用する場合は、Management Center に表示されるデバイスの IP アドレスも変更します。[Management Center でのホスト名または IP アドレスの更新](#)を参照してください。スタティックルート、DDNS、DNS 設定などの新しいインターフェイスを使用するように、関連する構成も更新してください。

データインターフェイスからのマネージャアクセスには、次の制限があります。

- マネージャアクセスを有効にできるのは、1つの物理的なデータインターフェイスのみです。サブインターフェイスと EtherChannel は使用できません。冗長性を目的として、Management Center の単一のセカンダリインターフェイスでマネージャアクセスを有効にすることもできます。
- このインターフェイスは管理専用にはできません。
- ルーテッドインターフェイスを使用するルーテッドファイアウォールモードのみです。
- PPPoE はサポートされていません。ISP で PPPoE が必要な場合は、PPPoE をサポートするルータを Threat Defense と WAN モデムの上に配置する必要があります。
- インターフェイスを配置する必要があるのはグローバル VRF のみです。
- SSH はデータインターフェイスではデフォルトで有効になっていないため、後で Management Center を使用して SSH を有効にする必要があります。また、管理インターフェイス ゲートウェイがデータインターフェイスに変更されるため、**configure network static-routes** コマンドを使用して管理インターフェイス用の静的ルートを追加しない限り、リモートネットワークから管理インターフェイスに SSH 接続することはできません。Amazon Web Services の Threat Defense Virtual の場合、コンソールポートは使用できないため、管理インターフェイスへの SSH アクセスを維持する必要があります。設定を続行する前に、管理用の静的ルートを追加します。または、マネージャアクセス用のデータインターフェイスを設定する前に、すべての CLI 構成 (**configure manager add** コマンドを含む) を終了してから接続を切断します。
- 管理インターフェイスとイベント専用インターフェイスを別々に使用することはできません。
- クラスタリングはサポートされません。この場合、管理インターフェイスを使用する必要があります。

図 17: マネージャアクセス



- Firepower Management Center が専用の管理インターフェイスの代わりにこのデータインターフェイスを管理に使用するには、[このインターフェイス上の管理をマネージャに対して有効にする (Enable management on this interface for the manager)] をオンにします。
- (オプション) [許可された管理ネットワーク (Allowed Management Networks)] ボックスで、マネージャアクセスを許可するネットワークを追加します。デフォルトでは、すべてのネットワークが許可されます。

ステップ 16 [OK] をクリックします。

ステップ 17 [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

## ブリッジグループインターフェイスの設定

ブリッジグループは、Secure Firewall Threat Defense デバイスがルーティングではなくブリッジするインターフェイスのグループです。ブリッジグループはトランスペアレントファイアウォールモード、ルーテッドファイアウォールモードの両方でサポートされています。ブリッジグループの詳細については、[ブリッジグループについて](#)を参照してください。

ブリッジグループと関連インターフェイスを設定するには、次の手順を実行します。

## ブリッジグループメンバーの一般的なインターフェイスパラメータの設定

この手順は、ブリッジグループメンバーインターフェイスの名前とセキュリティゾーンを設定する方法について説明します。同じブリッジグループで、さまざまな種類のインターフェイス（物理インターフェイス、VLANサブインターフェイス、Firepower 1010 VLAN インターフェイス、EtherChannel、冗長インターフェイス）を含めることができます。管理インターフェイスはサポートされていません。ルーテッドモードでは、EtherChannelはサポートされません。Firepower 4100/9300 では、データ共有タイプのインターフェイスはサポートされていません。

### 始める前に

- **Firepower 4100/9300**

1. [物理インターフェイスの設定](#)
  2. (任意) 特別なインターフェイスを設定します。
    - [EtherChannel \(ポートチャネル\) の追加](#)
    - [コンテナインスタンスのVLANサブインターフェイスの追加](#) FXOS で次を実行します。
    - [Management Center でのサブインターフェイスの追加 \(22 ページ\)](#)
- (任意) 他のすべてのモデル :
    - [EtherChannel の設定](#)
    - [サブインターフェイスの追加 \(22 ページ\)](#)
    - [Firepower 1010 : VLAN インターフェイスの設定 \(6 ページ\)](#)

### 手順

- 
- ステップ 1** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。
- ステップ 2** 編集するインターフェイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。
- ステップ 3** [名前 (Name)] フィールドに、48 文字以内で名前を入力します。  
この名前を「cluster」という語句で始めることはできません。その名前は内部で使用するために予約されています。
- ステップ 4** [有効 (Enabled)] チェックボックスをオンにして、インターフェイスを有効化します。
- ステップ 5** (任意) このインターフェイスを [管理専用 (Management Only)] に設定してトラフィックを管理トラフィックに制限します。through-the-box トラフィックは許可されていません。
- ステップ 6** (任意) [Description] フィールドに説明を追加します。

説明は 200 文字以内で、改行を入れずに 1 行で入力します。

**ステップ 7** [モード (Mode) ] ドロップダウン リストで、[なし (None) ] を選択します。

通常のファイアウォール インターフェイスのモードは [なし (None) ] に設定されています。他のモードは IPS 専用インターフェイス タイプ向けです。このインターフェイスをブリッジグループに割り当てると、[スイッチド (Switched) ] がモードに表示されます。

**ステップ 8** [セキュリティゾーン (Security Zone) ] ドロップダウン リストからセキュリティゾーンを選択するか、[新規 (New) ] をクリックして、新しいセキュリティゾーンを追加します。

ブリッジグループメンバー インターフェイスは、スイッチドタイプ インターフェイスであり、スイッチドタイプのゾーンにのみ属することができます。このインターフェイスに対して IP アドレス設定は行わないでください。ブリッジ仮想インターフェイス (BVI) に対してのみ IP アドレスを設定します。BVI はゾーンに属しておらず、BVI にはアクセス コントロール ポリシーを適用できないことに注意してください。

**ステップ 9** MTU については [MTU の設定 \(76 ページ\)](#) を参照してください。

**ステップ 10** (任意) [ハードウェア構成 (Hardware Configuration) ] > [速度 (Speed) ] をクリックして、デュプレックスと速度を設定します。

- [デュプレックス (Duplex) ] : [全 (Full) ]、[半 (Half) ]、または [自動 (Auto) ] を選択します。SFP インターフェイスは [全二重 (Full) ] のみをサポートします。
- [速度 (Speed) ] : 速度を選択します (モデルによって異なります)。(Cisco Secure Firewall 3100/4200 のみ) [SFPを検出 (Detect SFP) ] を選択してインストールされている SFP モジュールの速度を検出し、適切な速度を使用します。デュプレックスは常に全二重で、自動ネゴシエーションは常に有効です。このオプションは、後でネットワークモジュールを別のモデルに変更し、速度を自動的に更新する場合に便利です。
- [自動ネゴシエーション (Auto-negotiation) ] : 速度、リンクステータス、およびフロー制御をネゴシエートするようにインターフェイスを設定します。
- [前方誤り訂正モード (Forward Error Correction Mode) ] : (Cisco Secure Firewall 3100/4200 のみ) 25 Gbps 以上のインターフェイスの場合は、前方誤り訂正 (FEC) を有効にします。EtherChannel メンバーインターフェイスの場合は、EtherChannel に追加する前に FEC を設定する必要があります。自動を使用する場合に選択する設定は、トランシーバのタイプと、インターフェイスが固定 (内蔵) かネットワークモジュールかによって異なります。

表 2: 自動設定のデフォルト FEC

トランシーバタイプ	固定ポートのデフォルト FEC (イーサネット 1/9 ~ 1/16)	ネットワークモジュールのデフォルト FEC
25G-SR	第 108 条 RS-FEC	第 108 条 RS-FEC
25G-LR	第 108 条 RS-FEC	第 108 条 RS-FEC
10/25G-CSR	第 108 条 RS-FEC	第 74 条 FC-FEC
25G-AOCxM	第 74 条 FC-FEC	第 74 条 FC-FEC

トランシーバタイプ	固定ポートのデフォルト FEC (イーサネット 1/9 ~ 1/16)	ネットワークモジュールのデ フォルト FEC
25G-CU2.5/3M	自動ネゴシエーション	自動ネゴシエーション
25G-CU4/5M	自動ネゴシエーション	自動ネゴシエーション
25/50/100G	第 91 条 RS-FEC	第 91 条 RS-FEC

- ステップ 11** (任意) [IPv6 アドレスの設定 \(56 ページ\)](#) を参照して [IPv6] タブでの IPv6 アドレスを設定します。
- ステップ 12** (任意) [MAC アドレスの設定 \(77 ページ\)](#) を参照して [詳細設定 (Advanced)] タブで MAC アドレスを手動で設定します。
- ステップ 13** [OK] をクリックします。
- ステップ 14** [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

## ブリッジ仮想インターフェイス (BVI) の設定

ブリッジグループごとに、IP アドレスを設定する BVI が必要です。Threat Defense はブリッジグループが発信元になるパケットの送信元アドレスとして、この IP アドレスを使用します。BVI IP アドレスは、接続されたネットワークと同じサブネット内にある必要があります。IPv4 トラフィックの場合、すべてのトラフィックを通過させるには、BVI IP アドレスが必要です。IPv6 トラフィックの場合は、少なくとも、トラフィックを通過させるリンクローカルアドレスを設定する必要があります。リモート管理などの管理操作を含めたフル機能を実現するために、グローバル管理アドレスを設定することを推奨します。

ルーテッドモードの場合、BVI に名前を指定すると、BVI がルーティングに参加します。名前を指定しなければ、ブリッジグループはトランスペアレント ファイアウォール モードの場合と同じように隔離されたままになります。

### 始める前に

セキュリティゾーンに BVI を追加することはできません。そのため、BVI にアクセスコントロールポリシーを適用することはできません。ゾーンに基づいてブリッジグループのメンバーインターフェイスにポリシーを適用する必要があります。

### 手順

- ステップ 1** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。

**ステップ 2** [インターフェイスの追加 (Add Interfaces) ]>[ブリッジグループインターフェイス (Bridge Group Interface) ]を選択します。

**ステップ 3** (ルーテッドモード) [名前 (Name) ]フィールドに、名前を 48 文字以内で入力します。

トラフィックをブリッジグループメンバーの外部 (たとえば、外部インターフェイスや他のブリッジグループのメンバー) にルーティングする必要がある場合は、BVIに名前を付ける必要があります。名前は大文字と小文字が区別されません。

**ステップ 4** [ブリッジグループ ID (Bridge Group ID) ]フィールドに、1 ~ 250 の間のブリッジグループ ID を入力します。

**ステップ 5** (オプション) [説明 (Description) ]フィールドに、このブリッジグループの説明を入力します。

**ステップ 6** [インターフェイス (Interfaces) ]タブでインターフェイスをクリックし、[追加 (Add) ]をクリックして [選択したインターフェイス (Selected Interfaces) ]領域にそのインターフェイスを移動します。ブリッジグループのメンバーにするすべてのインターフェイスに対して繰り返します。

**ステップ 7** (トランスペアレントモード) [IPv4] タブをクリックします。[IP アドレス (IP Address) ]フィールドに IPv4 アドレスおよびサブネット マスクを入力します。

BVIにはホストアドレス (/32 または 255.255.255.255) を割り当てないでください。また、/30 サブネットなど (255.255.255.252) 、ホストアドレスが3つ未満 (アップストリームルータ、ダウンストリームルータ、トランスペアレントファイアウォールにそれぞれ1つずつ) の他のサブネットを使用しないでください。Threat Defense デバイスは、サブネットの先頭アドレスと最終アドレスで送受信されるすべての ARP パケットをドロップします。たとえば、/30 サブネットを使用し、そのサブネットからアップストリームルータへの予約済みアドレスを割り当てた場合、Threat Defense デバイスはダウンストリームルータからアップストリームルータへの ARP 要求をドロップします。

高可用性の場合は、[モニター対象インターフェイス (Monitored Interfaces) ]エリアの [デバイス (Devices) ]>[デバイス管理 (Device Management) ]>[高可用性 (High Availability) ]タブで、スタンバイ IP アドレスを設定します。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブユニットはネットワークテストを使用してスタンバイインターフェイスをモニターできず、リンクステートをトラッキングすることしかできません。

**ステップ 8** (ルーテッドモード) [IPv4] タブをクリックします。IP アドレスを設定するには、[IP タイプ (IP Type) ] ドロップダウンリストにある次のオプションのいずれかを使用します。

高可用性およびクラスタリングインターフェイスは、静的 IP アドレス設定のみをサポートします。DHCP はサポートされていません。

- [静的 IP を使用する (Use Static IP) ] : IP アドレスおよびサブネットマスクを入力します。高可用性の場合は、静的 IP アドレスのみを使用できます。[モニター対象インターフェイス (Monitored Interfaces) ]エリアの [デバイス (Devices) ]>[デバイス管理 (Device Management) ]>[ハイアベイラビリティ (High Availability) ]タブで、スタンバイ IP アドレスを設定します。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブユニットはネットワークテストを使用してスタンバイインターフェイスをモニターできず、リンクステートをトラッキングすることしかできません。

- [DHCP の使用 (Use DHCP)] : 次のオプションのパラメータを設定します。
  - [DHCP を使用してデフォルトルートを取得 (Obtain default route using DHCP)] : DHCP サーバーからデフォルト ルートを取得します。
  - [DHCP ルートメトリック (DHCP route metric)] : アドミニストレーティブ ディスタンスを学習したルートに割り当てます (1 ~ 255)。学習したルートのデフォルトのアドミニストレーティブ ディスタンスは 1 です。

**ステップ 9** (任意) IPv6 アドレッシングの設定については、[IPv6 アドレスの設定 \(56 ページ\)](#) を参照してください。

**ステップ 10** (任意) [スタティック ARP エントリの追加 \(78 ページ\)](#) および [静的 MAC アドレスの追加とブリッジグループの MAC 学習の無効化 \(79 ページ\)](#) (トランスペアレント モードの場合のみ) を参照して **ARP** と **MAC** を設定します。

**ステップ 11** [OK] をクリックします。

**ステップ 12** [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

## IPv6 アドレスの設定

ここでは、ルーテッドモードおよびトランスペアレントモードで IPv6 アドレッシングを設定する方法について説明します。

### IPv6 について

このセクションには、IPv6 に関する情報が含まれています。

#### IPv6 アドレス指定

次の 2 種類の IPv6 のユニキャストアドレスを設定できます。

- **グローバル** : グローバルアドレスは、パブリック ネットワークで使用可能なパブリックアドレスです。ブリッジグループの場合、このアドレスは各メンバーインターフェイスごとに設定するのではなく、BVI 用に設定する必要があります。また、トランスペアレントモードで管理インターフェイスのグローバルな IPv6 アドレスを設定することもできます。
- **リンクローカル** : リンクローカルアドレスは、直接接続されたネットワークだけで使用できるプライベートアドレスです。ルータは、リンクローカルアドレスを使用してパケットを転送するのではなく、特定の物理ネットワークセグメント上で通信だけを行います。ルータは、アドレス設定またはアドレス解決などのネイバー探索機能に使用できます。ブリッジグループでは、メンバーインターフェイスのみがリンクローカルアドレスを所有しています。BVI にはリンクローカルアドレスはありません。



最低限、IPv6 が動作するようにリンクローカルアドレスを設定する必要があります。グローバルアドレスを設定すると、リンクローカルアドレスがインターフェイスに自動的に設定されるため、リンクローカルアドレスを個別に設定する必要はありません。ブリッジグループインターフェイスでは、BVI でグローバルアドレスを設定した場合、Threat Defense デバイスが自動的にメンバーインターフェイスのリンクローカルアドレスを生成します。グローバルアドレスを設定しない場合は、リンクローカルアドレスを自動的にするか、手動で設定する必要があります。

## Modified EUI-64 インターフェイス ID

RFC 3513 「Internet Protocol Version 6 (IPv6) Addressing Architecture」（インターネットプロトコルバージョン6アドレッシングアーキテクチャ）では、バイナリ値000で始まるものを除き、すべてのユニキャスト IPv6 アドレスのインターフェイス識別子部分は長さが 64 ビットで、Modified EUI-64 形式で組み立てることが要求されています。Threat Defense デバイスでは、ローカルリンクに接続されたホストにこの要件を適用できます。

この機能がインターフェイスで有効化されていると、そのインターフェイス ID が Modified EUI-64 形式を採用していることを確認するために、インターフェイスで受信した IPv6 パケットの送信元アドレスが送信元 MAC アドレスに照らして確認されます。IPv6 パケットがインターフェイス ID に Modified EUI-64 形式を採用していない場合、パケットはドロップされ、次のシステム ログ メッセージが生成されます。

```
325003: EUI-64 source address check failed.
```

アドレス形式の確認は、フローが作成される場合にのみ実行されます。既存のフローからのパケットは確認されません。また、アドレスの確認はローカルリンク上のホストに対してのみ実行できます。

## IPv6 プレフィックス委任クライアントの設定

Threat Defense は、（ケーブルモデムに接続された外部インターフェイスなどの）クライアントインターフェイスが1つ以上のIPv6プレフィックスを受け取れるようにDHPCv6プレフィックス委任クライアントとして機能することができ、Threat Defense はそのプレフィックスをサブネット化して内部インターフェイスに割り当てることが可能です。

### IPv6 プレフィックス委任の概要

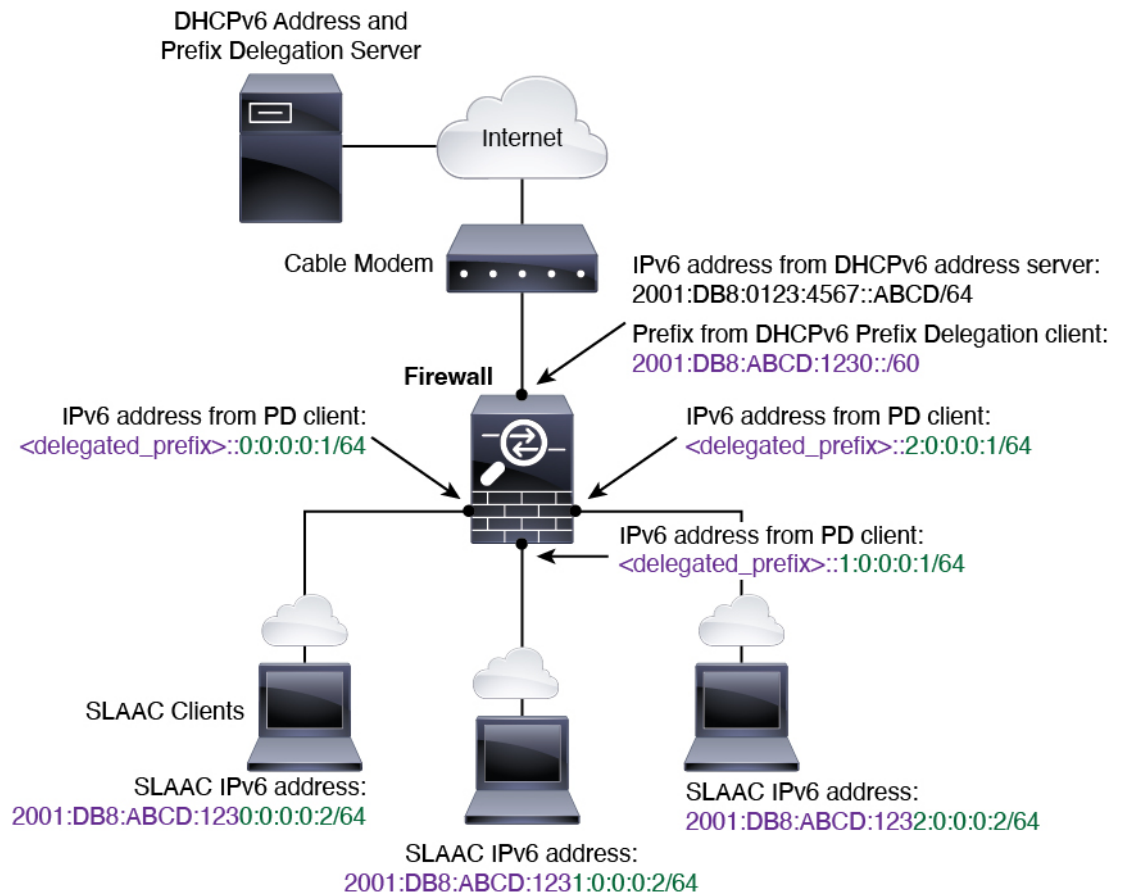
Threat Defense は、（ケーブルモデムに接続された外部インターフェイスなどの）クライアントインターフェイスが1つ以上のIPv6プレフィックスを受け取れるようにDHPCv6プレフィックス委任クライアントとして機能することができ、Threat Defense はそのプレフィックスをサブネット化して内部インターフェイスに割り当てることが可能です。これにより、内部インターフェイスに接続されているホストは、StateLess Address Auto Configuration (SLAAC) を使用してグローバル IPv6 アドレスを取得できます。ただし、内部 Threat Defense インターフェイスはプレフィックス委任サーバーとして機能しないため注意してください。Threat Defense は、SLAAC クライアントにグローバル IP アドレスを提供することしかできません。たとえば、ルータが Threat Defense に接続されている場合、ASA は SLAAC クライアントとして機能し、IP アドレスを取得できます。しかし、ルータの背後のネットワークに代理プレフィックスのサ

ブネットを使用したい場合、ルータの内部インターフェイス上でそれらのアドレスを手動で設定する必要があります。

Threat Defense には軽量 DHCPv6 サーバーが含まれており、SLAAC クライアントが情報要求 (IR) パケットを Threat Defense に送信した場合、Threat Defense は DNS サーバーやドメイン名などの情報を SLAAC クライアントに提供できます。Threat Defense は、IR パケットを受け取るだけで、クライアントにアドレスを割り当てません。クライアントが独自の IPv6 アドレスを生成するように設定するには、クライアントで IPv6 自動設定を有効にします。クライアントでステートレスな自動設定を有効にすると、ルータ アドバタイズメントメッセージで受信したプレフィックス (Threat Defense がプレフィックス委任を使用して受信したプレフィックス) に基づいて IPv6 アドレスが設定されます。

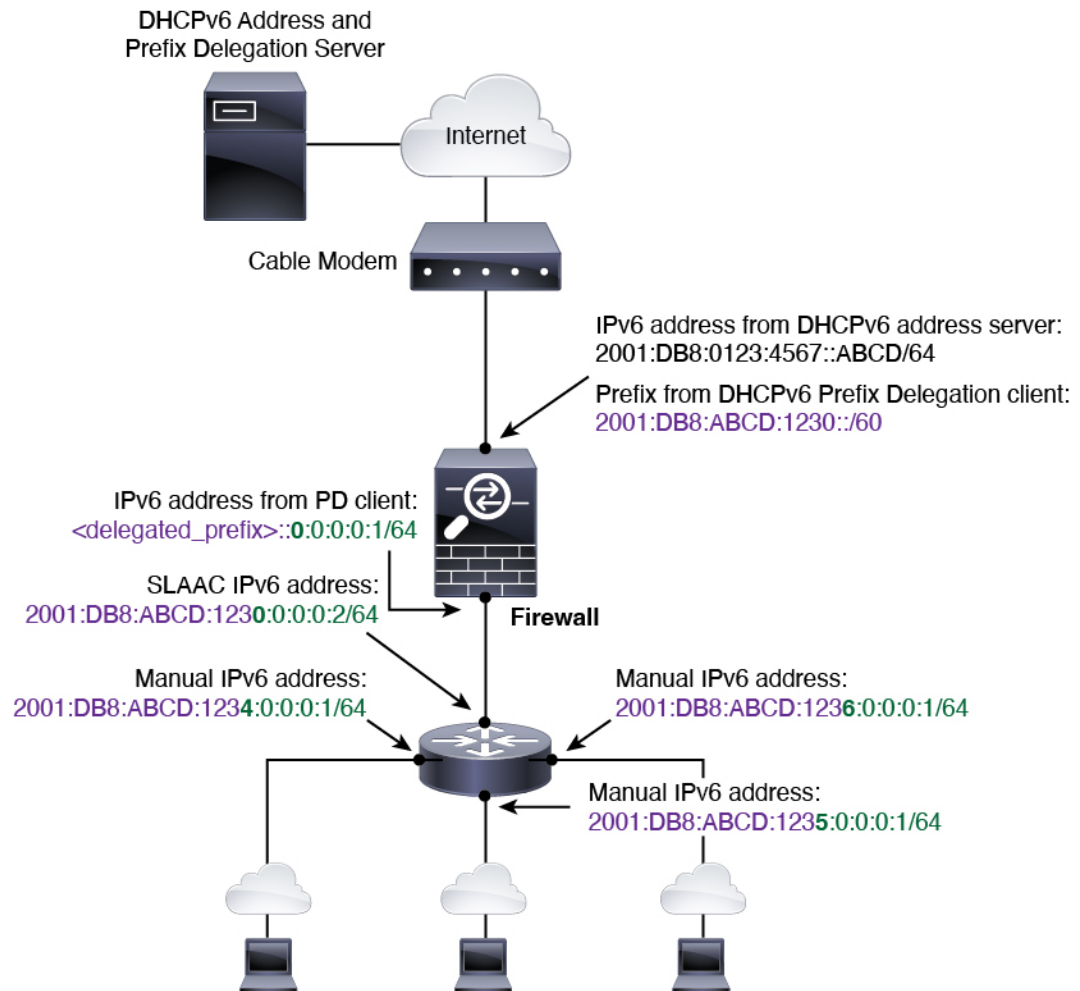
#### IPv6 プレフィックス委任 /64 サブネットの例

次の例では、Threat Defense が DHCPv6 アドレスクライアントを使用して、外部インターフェイス上で IP アドレスを受け取ることを示しています。また、ASA は DHCPv6 プレフィックス委任クライアントを使用して代理プレフィックスを取得します。Threat Defense は、委任されたプレフィックスを /64 ネットワークにサブネット化し、委任されたプレフィックスと手動で設定されたサブネット (::0、::1、または::2) と各インターフェイスの IPv6 アドレス (0:0:0:1) を使用して、動的に内部インターフェイスにグローバル IPv6 アドレスを割り当てます。これらの内部インターフェイスに接続されている SLAAC クライアントは、各 /64 サブネットの IPv6 アドレスを取得します。



IPv6 プレフィックス委任 /62 サブネットの例

次の例は、Threat Defense が 4/62 サブネットにプレフィックスをサブネット化するところを示しています。2001:DB8:ABCD:1230::/62、2001:DB8:ABCD:1234::/62、2001:DB8:ABCD:1238::/62、2001:DB8:ABCD:123C::/62。Threat Defense は、内部ネットワーク (::0) に 2001:DB8:ABCD:1230::/62 の利用可能な 64 サブネット 4 つのいずれかを使用します。ダウンストリームルータには、手動で追加の /62 サブネットを使用できます。図のルータは、内部インターフェイス (::4, ::5, and ::6) に 2001:DB8:ABCD:1234::/62 の利用可能な 4 つの /64 サブネットのうち 3 つを使用します。この場合、内部ルータインターフェイスは委任されたプレフィックスを動的に取得できないため、Threat Defense 上で委任されたプレフィックスを表示し、ルータ設定にそのプレフィックスを使用する必要があります。通常、リースが期限切れになった場合、ISP は既定のクライアントに同じプレフィックスを委任しますが、Threat Defense が新しいプレフィックスを受け取った場合、新しいプレフィックスを使用するようルータ設定を変更する必要があります。DHCP の一意識別子 (DUID) は、再起動後も存続します。



## IPv6 プレフィックス委任クライアントの有効化

1つ以上のインターフェイスで DHCPv6 プレフィックス委任クライアントをイネーブルにします。Threat Defense は、サブネット化して内部ネットワークに割り当てることができる 1つ以上の IPv6 プレフィックスを取得します。通常、プレフィックス委任クライアントを有効にしたインターフェイスは DHCPv6 アドレスクライアントを使用して IP アドレスを取得し、その他の Threat Defense インターフェイスだけが、委任されたプレフィックスから取得されるアドレスを使用します。

この機能は、ルーテッドモードでのみサポートされます。この機能は、クラスタリングまたはハイアベイラビリティではサポートされません。

### 始める前に

プレフィックス委任を使用する場合は、IPv6 トラフィックの中断を防ぐために、Threat Defense IPv6 ネイバー探索のルーターアダバタイズメント間隔を DHCPv6 サーバーによって割り当てられるプレフィックスの推奨有効期間よりもはるかに小さい値に設定する必要があります。たとえば、DHCPv6 サーバーでプレフィックス委任の推奨有効期間を 300 秒に設定している場合

は、Threat Defense RA の間隔を 150 秒に設定する必要があります。推奨有効期間を設定するには、**show ipv6 general-prefix** コマンドを使用します。Threat Defense RA の間隔を設定するには、「[IPv6 ネイバー探索の設定 \(67 ページ\)](#)」を参照してください。デフォルトは 200 秒です。

## 手順

- ステップ 1 [デバイス (Devices) ] > [デバイス管理 (Device Management) ] を選択し、Threat Defense デバイス [編集 (Edit) ] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces) ] タブがデフォルトで選択されます。
- ステップ 2 編集するインターフェイス [編集 (Edit) ] (✎) をクリックします。
- ステップ 3 [IPv6] ページをクリックしてから、[DHCP] をクリックします。
- ステップ 4 [クライアントPDプレフィックス名 (Client PD Prefix Name) ] をクリックし、このプレフィックスの名前を入力します。

図 18: プレフィックス委任クライアントの有効化

● Client PD Prefix Name

Outside-Prefix

Client PD Hint Prefixes

Add

2001:DB8:ABCD:1230::/60

名前には最大 200 文字を使用できます。

- ステップ 5 (任意) [クライアントPDヒントプレフィックス (Client PD Hint Prefixes) ] フィールドにプレフィックスとプレフィックス長を入力し、受信する委任されたプレフィックスに関する DHCP サーバーへのヒントを 1 つ以上指定して [追加 (Add) ] をクリックします。

通常、特定のプレフィックス長 (::/60 など) を要求しますが、以前に特定のプレフィックスを受信しており、リースの期限が切れるときにそれを確実に再取得したい場合は、そのプレフィックスの全体をヒントとして入力できます。複数のヒント (異なるプレフィックスまたはプレフィックス長) を入力すると、どのヒントに従うのか、またはそもそもヒントに従うのかどうか DHCP サーバーによって決定されます。

- ステップ 6 [OK] をクリックします。
- ステップ 7 [Save (保存) ] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy) ] > [展開 (Deployment) ] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

## グローバル IPv6 アドレスの設定

ルーテッドモードの任意のインターフェイスとトランスペアレントモードまたはルーテッドモードの BVI に対してグローバル IPv6 アドレスを設定するには、次の手順を実行します。



- (注) グローバルアドレスを設定すると、リンクローカルアドレスは自動的に設定されるため、別々に設定する必要はありません。ブリッジグループについて、BVI でグローバルアドレスを設定すると、すべてのメンバーインターフェイスのリンクローカルアドレスが自動的に設定されます。

Threat Defense で定義されているサブインターフェイスの場合、親インターフェイスの同じ Burned-In MAC Address を使用するので、MAC アドレスも手動で設定することをお勧めします。IPv6 リンクローカルアドレスは MAC アドレスに基づいて生成されるため、サブインターフェイスに一意的 MAC アドレスを割り当てることで、一意の IPv6 リンクローカルアドレスが可能になり、Threat Defense で特定のインスタンスでのトラフィックの中断を避けることができます。[MAC アドレスの設定 \(77 ページ\)](#) を参照してください。

### 始める前に

ブリッジグループの IPv6 ネイバー探索では、双方向アクセスルールを使用して、Threat Defense ブリッジグループメンバーインターフェイスでネイバー送信要求 (ICMPv6 タイプ 135) およびネイバーアドバタイズメント (ICMPv6 タイプ 136) パケットを明示的に許可する必要があります。

### 手順

- ステップ 1** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。
- ステップ 2** 編集するインターフェイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。
- ステップ 3** [IPv6] ページをクリックします。
- ルーテッドモードでは、[基本 (Basic)] ページがデフォルトで選択されています。トランスペアレントモードでは、[アドレス (Address)] ページがデフォルトで選択されています。
- ステップ 4** (任意) [基本 (Basic)] ページで、[IPv6 を有効にする (Enable IPv6)] をオンにします。
- リンクローカルアドレスのみを設定する場合は、このオプションを使用します。それ以外の場合、IPv6 アドレスを設定すると、IPv6 処理が自動的に有効になります。
- ステップ 5** グローバル IPv6 アドレスを次のいずれかの方法で設定します。
- ループバック インターフェイスは手動設定のみをサポートします。
- (ルーテッドインターフェイス) ステートレス自動設定: [自動設定 (Autoconfiguration)] チェックボックスをオンにします。

インターフェイス上でステートレス自動設定を有効にすると、受信したルータアドバタイズメントメッセージのプレフィックスに基づいて IPv6 アドレスを設定します。ステートレスな自動設定が有効になっている場合、インターフェイスのリンクローカルアドレスは、Modified EUI-64 インターフェイス ID に基づいて自動的に生成されます。

RFC 4862 では、ステートレス自動設定用に設定されたホストはルータアドバタイズメントメッセージを送信しないと規定されていますが、この場合は、Threat Defense デバイスがルータアドバタイズメントメッセージを送信します。[IPv6]>[設定 (Settings)]>[RAの有効化 (Enable RA)] チェックボックスをオフにして、メッセージを抑制します。

- 手動設定：グローバル IPv6 アドレスを手動で設定するには、次の手順を実行します。

1. [アドレス (Address)] ページ、[アドレスの追加 (Add Address)] (+) の順にクリックします。

[アドレスの追加 (Add Address)] ダイアログボックスが表示されます。

2. [アドレス (Address)] フィールドに、インターフェイス ID を含む完全なグローバル IPv6 アドレス、または IPv6 プレフィックス長と IPv6 プレフィックスのいずれかを入力します。(ルーテッドモード) プレフィックスだけを入力した場合は、必ず[EUI-64を適用 (Enforce EUI 64)] チェックボックスをオンにして、Modified EUI-64 形式を使用してインターフェイス ID を生成するようにしてください。たとえば、2001:0DB8::BA98:0:3210/48 (完全なアドレス) または 2001:0DB8::/48 (プレフィックス、[EUI 64] はオン)。

([EUI 64の適用 (Enforce EUI 64)] を設定しなかった場合は) 高可用性のために、[モニター対象インターフェイス (Monitored Interfaces)] 領域の [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [高可用性 (High Availability)] ページでスタンバイ IP アドレスを設定します。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブユニットはネットワークテストを使用してスタンバイインターフェイスをモニタできず、リンクステートをトラッキングすることしかできません。

- (ルーテッドインターフェイス) DHCPv6 を使用してアドレスを取得する：DHCPv6 を使用するには、次の手順を実行します。

図 19: DHCPv6 クライアントの有効化

Edit Physical Interface				
General	IPv4	IPv6	Path Monitoring	Hardware
Basic	Address	Prefixes	Settings	DHCP
<input checked="" type="checkbox"/>	Enable DHCP Client	<input type="checkbox"/>	Enable	
<input checked="" type="checkbox"/>	Enable default route using DHCP	<input type="checkbox"/>	Enable	

1. [DHCP] ページをクリックします。
2. [DHCPクライアントの有効化 (Enable DHCP Client)] チェックボックスをオンにします。

3. (オプション) ルータアドバタイズメントからデフォルトルートを取得するには、[DHCPを使用してデフォルトルートの有効にする (Enable default route using DHCP)] チェックボックスをクリックします。
- (ルーテッドインターフェイス) 委任されたプレフィックスを使用する：委任されたプレフィックスを使用して IPv6 アドレスを割り当てるには、次の手順を実行します。

この機能は、Threat Defense に別のインターフェイスで DHCPv6 プレフィックス委任クライアントを有効にさせるために必要です。IPv6 プレフィックス委任クライアントの有効化 (60 ページ) を参照してください。

1. [DHCP] ページをクリックします。
2. **Add (+)** をクリックします。

図 20: 委任されたプレフィックスの使用

3. 別のインターフェイスでプレフィックス委任クライアントに指定したプレフィックス名を入力します (「IPv6 プレフィックス委任クライアントの有効化 (60 ページ)」を参照)。

図 21: プレフィックス名とアドレスの指定

4. IPv6 アドレスとプレフィックス長を入力します。



通常、委任されたプレフィックスは /60 以下であるため、複数 /64 ネットワークにサブネットワーク化できます。接続されるクライアント用に SLAAC をサポートする必要がある場合は、/64 がサポートされるサブネット長です。/60 サブネットを補完するアドレス (1:0:0:0:1 など) を指定する必要があります。プレフィックスが /60 未満の場合は、アドレスの前に :: を入力します。たとえば、委任されたプレフィックスが 2001:DB8:1234:5670::/60 である場合、このインターフェイスに割り当てられるグローバル IP アドレスは 2001:DB8:1234:5671::1/64 です。ルータ アドバタイズメントでアドバタイズされるプレフィックスは 2001:DB8:1234:5671::/64 です。この例では、プレフィックスが /60 未満である場合、プレフィックスの残りのビットは、前に配置される :: によって示されるように、0 になります。たとえば、プレフィックスが 2001:DB8:1234::/48 である場合、IPv6 アドレスは 2001:DB8:1234::1:0:0:0:1/64 になります。

5. [OK] をクリックします。

図 22: プレフィックス委任テーブル

Prefix Name	Prefix Length	
Outside-Prefix	::1:0:0:0:1/64	

+ Add

6. 必要に応じて、このインターフェイスで DHCPv6 ステートレスサーバーを有効にします (「[DHCPv6 ステートレスサーバーの有効化](#)」を参照)。その場合は、[アドレス以外の設定で DHCP を有効にする (Enable DHCP for non-address config)] オプションもオンにすることをお勧めします。

**ステップ 6** ルーテッドインターフェイスの場合は、必要に応じて [基本 (Basic)] ページで次の値を設定できます。

- ローカルリンクの IPv6 アドレスに Modified EUI-64 形式のインターフェイス識別子の使用を適用するには、[EUI-64 を適用 (Enforce EUI-64)] チェックボックスをオンにします。
- リンクローカルアドレスを手動で設定するには、[リンクローカルアドレス (Link-Local address)] フィールドにアドレスを入力します。

リンクローカルアドレスは、FE8、FE9、FEA、または FEB で始まっている必要があります。例、fe80::20d:88ff:feec:6a82。グローバルアドレスを設定する必要がなく、リンクローカルアドレスだけを設定する必要がある場合は、リンクローカルアドレスを手動で定義できます。Modified EUI-64 形式に基づくリンクローカルアドレスを自動的に割り当てることを推奨します。たとえば、その他のデバイスで Modified EUI-64 形式の使用が強制される場合、手動で割り当てたリンクローカルアドレスによりパケットがドロップされることがあります。

**ステップ 7** ルーテッドインターフェイスの場合は、必要に応じて [DHCP] ページで次の値を設定できます。

- [アドレス設定の DHCP を有効化 (Enable DHCP for address config) ] チェックボックスをオンにして、IPv6 ルータ アドバタイズメント パケットの Managed Address Config フラグを設定します。

IPv6 ルータ アドバタイズメント内のこのフラグは、取得されるステートレス自動設定のアドレス以外のアドレスの取得に DHCPv6 を使用する必要があることを、IPv6 自動設定クライアントに通知します。

- [アドレス設定の DHCP を有効化 (Enable DHCP for address config) ] チェックボックスをオンにして、IPv6 ルータ アドバタイズメント パケットの Other Address Config フラグを設定します。

IPv6 ルータ アドバタイズメント内のこのフラグは、DHCPv6 から DNS サーバー アドレスなどの追加情報の取得に DHCPv6 を使用する必要があることを、IPv6 自動設定クライアントに通知します。DHCPv6 プレフィックス委任で DHCPv6 ステートレスサーバーを使用する場合は、このオプションを使用します。

**ステップ 8** ルーテッドインターフェイスの場合は、[プレフィックス (Prefixes) ] ページと [設定 (Settings) ] ページでの設定について「[IPv6 ネイバー探索の設定 \(67 ページ\)](#)」を参照してください。BVI インターフェイスの場合は、[設定 (Settings) ] ページの以下のパラメータを参照してください。

- [DAD 試行 (DAD attempts) ] : DAD 試行の最大数 (1 ~ 600) 。重複アドレス検出 (DAD) プロセスを無効化するには、この値を 0 に設定します。この設定では、DAD が IPv6 アドレスで実行されている間に、インターフェイスに連続して送信されるネイバー送信要求メッセージの数を設定します。デフォルトでは 1 になっています。
- [NS 間隔 (NS Interval) ] : インターフェイスでの IPv6 ネイバー要請再送信の間隔 (1000 ~ 3600000 ms) 。デフォルト値は 1000 ミリ秒です。
- [到達可能時間 (Reachable Time) ] : 到達可能性確認イベントが発生した後でリモートの IPv6 ノードを到達可能とみなす時間 (0 ~ 3600000 ms) 。デフォルト値は 0 ミリ秒です。value に 0 を使用すると、到達可能時間が判定不能として送信されます。到達可能時間の値を設定し、追跡するのは、受信デバイスの役割です。ネイバー到達可能時間を設定すると、使用できないネイバーを検出できます。時間を短く設定すると、使用できないネイバーをより早く検出できます。ただし、時間を短くするほど、IPv6 ネットワーク帯域幅とすべての IPv6 ネットワーク デバイスの処理リソースの消費量が増えます。通常の IPv6 の運用では、あまり短い時間設定は推奨できません。

**ステップ 9** [OK] をクリックします。

**ステップ 10** [Save (保存) ] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy) ] > [展開 (Deployment) ] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

## IPv6 ネイバー探索の設定

IPv6 ネイバー探索プロセスは、ICMPv6 メッセージおよび要請ノードマルチキャストアドレスを使用して、同じネットワーク（ローカルリンク）上のネイバーのリンク層アドレスを特定し、ネイバーの読み出し可能性を確認し、隣接ルータを追跡します。

ノード（ホスト）はネイバー探索を使用して、接続リンク上に存在することがわかっているネイバーのリンク層アドレスの特定や、無効になったキャッシュ値の迅速なパージを行います。また、ホストはネイバー探索を使用して、ホストに代わってパケットを転送しようとしている隣接ルータを検出します。さらに、ノードはこのプロトコルを使用して、どのネイバーが到達可能でどのネイバーがそうでないかをアクティブに追跡するとともに、変更されたリンク層アドレスを検出します。ルータまたはルータへのパスが失われると、ホストは機能している代替ルータまたは代替パスをアクティブに検索します。

### 始める前に

ルーテッドモードのみでサポートされます。トランスペアレントモードでサポートされる IPv6 ネイバー設定については、「[グローバル IPv6 アドレスの設定（62 ページ）](#)」を参照してください。

### 手順

- ステップ 1** [デバイス (Devices) ] > [デバイス管理 (Device Management) ] を選択し、Threat Defense デバイス [編集 (Edit) ] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces) ] タブがデフォルトで選択されます。
- ステップ 2** 編集するインターフェイス [編集 (Edit) ] (✎) をクリックします。
- ステップ 3** [IPv6]、[プレフィックス (Prefixes) ] の順にクリックします。
- ステップ 4** (任意) IPv6 ルータ アドバタイズメントに含める IPv6 プレフィックスを設定するには、次の手順を実行します。
  - a) [プレフィックスの追加 (Add Prefix) ] をクリックします。 (+)
  - b) [アドレス (Address) ] フィールドに、プレフィックス長の IPv6 アドレスを入力するか、または [デフォルト (Default) ] チェックボックスをオンにして、デフォルトのプレフィックスを使用します。
  - c) (任意) IPv6 プレフィックスをアドバタイズしない場合は、[アドバタイズメント (Advertisement) ] チェックボックスをオフにします。
  - d) [オフリンク (Off Link) ] チェックボックスをオンにして、指定したプレフィックスがリンクに割り当てられたことを示します。指定したプレフィックスを含むアドレスにトラフィックを送信するノードは、宛先がリンク上でローカルに到達可能であると見なします。このプレフィックスは、オンリンクの判別には使用しないでください。
  - e) 指定されているプレフィックスを自動設定に使用する場合、[自動設定 (Autoconfiguration) ] チェックボックスをオンにします。
  - f) [プレフィックス ライフタイム (Prefix Lifetime) ] で、[期間 (Duration) ] または [失効日 (Expiration Date) ] をクリックします。

- [期間 (Duration) ]: プレフィックスの [優先ライフタイム (Preferred Lifetime) ]を秒単位で入力します。この設定は、指定の IPv6 プレフィックスが有効なものとしてアドバタイズする時間です。最大値は無制限です。有効な値は 0 ~ 4294967295 です。デフォルトは 2592000 (30 日間) です。プレフィックスの [有効ライフタイム (Valid Lifetime) ]を秒単位で入力します。この設定は、指定の IPv6 プレフィックスが優先であるとしてアドバタイズする時間です。最大値は無制限です。有効な値は 0 ~ 4294967295 です。デフォルト設定は、604800 (7日) です。または、[無限大 (Infinite) ] チェックボックスをオンにして、時間無制限を設定します。
- [失効日 (Expiration Date) ]: [有効 (Valid) ], [優先 (Preferred) ]日時を選択します。

g) [OK] をクリックします。

**ステップ 5** [設定 (Settings) ] をクリックします。

**ステップ 6** (任意) [DAD 試行 (DAD attempts) ] の最大数、1 ~ 600 を設定します。デフォルトでは 1 になっています。重複アドレス検出 (DAD) プロセスを無効化するには、この値を 0 に設定します。

この設定では、DAD が IPv6 アドレスで実行されている間に、インターフェイスに連続して送信されるネイバー送信要求メッセージの数を設定します。

ステートレス自動設定プロセス中に、重複アドレス検出は、アドレスがインターフェイスに割り当てられる前に、新しいユニキャスト IPv6 アドレスの一意性を確認します。

重複アドレスが検出されると、そのアドレスの状態は DUPLICATE に設定され、アドレスは使用対象外となり、次のエラーメッセージが生成されます。

```
325002: Duplicate address ipv6_address/MAC_address on interface
```

重複アドレスがインターフェイスのリンクローカルアドレスであれば、インターフェイス上で IPv6 パケットの処理は無効になります。重複アドレスがグローバルアドレスであれば、そのアドレスは使用されません。

**ステップ 7** (任意) [NS インターバル (NS Interval) ] フィールドで、IPv6 ネイバー勧誘再送信の時間の間隔を、1000 ~ 3600000ms で設定します。

デフォルト値は 1000 ミリ秒です。

ローカルリンク上にある他のノードのリンクレイヤアドレスを検出するため、ノードからネイバー送信要求メッセージ (ICMPv6 Type 135) がローカルリンクに送信されます。ネイバー送信要求メッセージを受信すると、宛先ノードは、ネイバーアドバタイズメントメッセージ (ICMPv6 Type 136) をローカルリンク上に送信して応答します。

送信元ノードがネイバーアドバタイズメントを受信すると、送信元ノードと宛先ノードが通信できるようになります。ネイバー送信要求メッセージは、ネイバーのリンク層アドレスが識別された後に、ネイバーの到達可能性の確認にも使用されます。ノードがあるネイバーの到達可能性を検証する場合、ネイバー送信要求メッセージ内の宛先アドレスとして、そのネイバーのユニキャストアドレスを使用します。

ネイバー アドバタイズメント メッセージは、ローカル リンク上のノードのリンク層アドレスが変更されたときにも送信されます。

**ステップ 8** (任意) 到達可能性確認イベントが発生した後でリモート IPv6 ノードが到達可能であると見なされる時間を、[到達可能時間 (Reachable Time)] フィールドにて、0 ~ 3600000ms で設定します。

デフォルト値は 0 ミリ秒です。value に 0 を使用すると、到達可能時間が判定不能として送信されます。到達可能時間の値を設定し、追跡するのは、受信デバイスの役割です。

ネイバー到達可能時間を設定すると、使用できないネイバーを検出できます。時間を短く設定すると、使用できないネイバーをより早く検出できます。ただし、時間を短くするほど、IPv6 ネットワーク帯域幅とすべての IPv6 ネットワーク デバイスの処理リソースの消費量が増えます。通常の IPv6 の運用では、あまり短い時間設定は推奨できません。

**ステップ 9** (任意) ルータ アドバタイズメントの伝送を抑制するには、[RA を有効にする (Enable RA)] チェックボックスをオフにします。ルータアドバタイズメントの伝送を有効にすると、RA ライフタイムと時間間隔を設定できます。

ルータ要請メッセージ (ICMPv6 Type 133) に応答して、ルータ アドバタイズメント メッセージ (ICMPv6 Type 134) が自動的に送信されます。ルータ要請メッセージは、システムの起動時にホストから送信されるため、ホストは、次にスケジュールされているルータアドバタイズメントメッセージを待つことなくただちに自動設定を行うことができます。

Threat Defense で IPv6 プレフィックスを提供する必要がないインターフェイス (外部インターフェイスなど) では、これらのメッセージを無効化できます。

- [RA ライフタイム (RA Lifetime)] : IPv6 ルータ アドバタイズメントのルータのライフタイム値を、0 ~ 9000 秒で設定します。

デフォルトは 1800 秒です。

- [RA インターバル (RA Interval)] : IPv6 ルータ アドバタイズメントの伝送の間の時間間隔を、3 ~ 1800 秒で設定します。

デフォルトは 200 秒です。

**ステップ 10** [OK] をクリックします。

**ステップ 11** [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

## 高度なインターフェイスの設定

この項では、通常ファイアウォールモードのインターフェイスの MAC アドレスの設定方法、最大伝送ユニット (MTU) の設定方法、およびその他の詳細パラメータの設定方法について説明します。

### インターフェイスの詳細設定について

ここでは、インターフェイスの詳細設定について説明します。

#### MAC アドレスについて

手動で MAC アドレスを割り当ててデフォルトをオーバーライドできます。コンテナインスタンスでは、FXOS シャーシがすべてのインターフェイスに一意の MAC アドレスを自動的に生成します。



(注) 親インターフェイスと同じ組み込みの MAC アドレスを使用するので、Threat Defense で定義されたサブインターフェイスに一意の MAC アドレスを割り当てることもできます。たとえば、サービスプロバイダーによっては、MAC アドレスに基づいてアクセス制御を行う場合があります。また、IPv6 リンクローカルアドレスは MAC アドレスに基づいて生成されるため、サブインターフェイスに一意の MAC アドレスを割り当てることで、一意の IPv6 リンクローカルアドレスが可能になり、Threat Defense デバイスで特定のインスタンスでのトラフィックの中断を回避できます。



(注) コンテナインスタンスでは、MAC アドレスを手動で設定すると、サブインターフェイスを共有していない場合でも、分類が正しく行われるように、同じ親インターフェイス上のすべてのサブインターフェイスで一意の MAC アドレスを使用します。

#### デフォルトの MAC アドレス

ネイティブインスタンス向け：

デフォルトの MAC アドレスの割り当ては、インターフェイスのタイプによって異なります。

- 物理インターフェイス：物理インターフェイスは Burned-In MAC Address を使用します。
- VLAN インターフェイス (Firepower 1010 および)：ルーテッドファイアウォールモード：すべての VLAN インターフェイスが MAC アドレスを共有します。接続スイッチがどれもこのシナリオをサポートできるようにします。接続スイッチに固有の MAC アドレスが必要な場合、手動で MAC アドレスを割り当てるができます。[MAC アドレスの設定 \(77 ページ\)](#) を参照してください。

トランスペアレントファイアウォールモード：各 VLAN インターフェイスに固有の MAC アドレスがあります。必要に応じて、手動で MAC アドレスを割り当てて、生成された MAC アドレスを上書きできます。[MAC アドレスの設定 \(77 ページ\)](#) を参照してください。

- **EtherChannel (Firepower Models)** : EtherChannel の場合は、そのチャンネル グループに含まれるすべてのインターフェイスが同じ MAC アドレスを共有します。この機能によって、EtherChannel はネットワークアプリケーションとユーザに対してトランスペアレントになります。ネットワークアプリケーションやユーザから見えるのは1つの論理接続のみであり、個々のリンクのことは認識しないためです。ポート チャンネル インターフェイスは、プールからの一意の MAC アドレスを使用します。インターフェイスのメンバーシップは、MAC アドレスには影響しません。
- **EtherChannel (ASA モデル)** : ポートチャンネルインターフェイスは、最も小さいチャンネルグループ インターフェイスの MAC アドレスをポート チャンネル MAC アドレスとして使用します。または、ポートチャンネル インターフェイスの MAC アドレスを設定することもできます。グループチャンネル インターフェイス メンバーシップが変更された場合に備えて、一意の MAC アドレスを構成することを推奨します。ポートチャンネル MAC アドレスを提供していたインターフェイスを削除すると、そのポートチャンネルの MAC アドレスは次に番号が小さいインターフェイスに変わるため、トラフィックが分断されます。
- **サブインターフェイス (Threat Defense 定義済み)** : 物理インターフェイスのすべてのサブインターフェイスは同じバインドイン MAC アドレスを使用します。サブインターフェイスに一意の MAC アドレスを割り当てる必要がある場合があります。たとえば、サービス プロバイダーによっては、MAC アドレスに基づいてアクセス制御を行う場合があります。また、IPv6 リンクローカルアドレスは MAC アドレスに基づいて生成されるため、サブインターフェイスに一意の MAC アドレスを割り当てることで、一意の IPv6 リンクローカルアドレスが可能になり、Threat Defense で特定のインスタンスでのトラフィックの中断を避けることができます。

#### コンテナインスタンス向け：

- すべてのインターフェイスの MAC アドレスは MAC アドレス プールから取得されます。サブインターフェイスでは、MAC アドレスを手動で設定する場合、分類が正しく行われるように、同じ親インターフェイス上のすべてのサブインターフェイスで一意の MAC アドレスを使用します。[コンテナ インスタンス インターフェイスの自動 MAC アドレス](#) を参照してください。

## MTU について

MTU は、Threat Defense デバイス が特定のイーサネット インターフェイスで送信可能な最大フレームペイロードサイズを指定します。MTU の値は、イーサネット ヘッダー、VLAN タギング、またはその他のオーバーヘッドを含まないフレームサイズです。たとえば MTU を 1500 に設定した場合、想定されるフレーム サイズはヘッダーを含めて 1518 バイト、VLAN を使用する場合は 1522 バイトです。これらのヘッダーに対応するために MTU 値を高く設定しないでください。



Geneve については、イーサネットデータグラム全体がカプセル化されるため、新しい IP パケットは大きくなり、より大きな MTU が必要となります。そのため、ASA VTEP 送信元インターフェイスの MTU をネットワーク MTU + 306 バイトに設定する必要があります。

## パス MTU ディスカバリ

Threat Defense デバイスは、Path MTU Discovery (RFC 1191 の定義に従う) をサポートします。つまり、2 台のホスト間のネットワークパス内のすべてのデバイスで MTU を調整できます。したがってパスの最小 MTU の標準化が可能です。

## デフォルト MTU

Threat Defense デバイスのデフォルト MTU は、1500 バイトです。この値には、イーサネットヘッダー、VLAN タギングや他のオーバーヘッド分の 18~22 バイトは含まれません。

## MTU およびフラグメンテーション

IPv4 では、出力 IP パケットが指定された MTU より大きい場合、2 つ以上のフレームにフラグメント化されます。フラグメントは宛先（場合によっては中間ホップ）で組み立て直されますが、フラグメント化はパフォーマンス低下の原因となります。IPv6 では、通常、パケットをフラグメント化することはできません。したがって、フラグメント化を避けるために、IP パケットを MTU サイズ以内に収める必要があります。

TCP パケットでは、通常、エンドポイントは MTU を使用して TCP の最大セグメントサイズを決定します (MTU - 40 など)。途中で追加の TCP ヘッダーが追加された場合 (たとえば、サイト間 VPN トンネル)、TCP MSS はトンネリングエンティティで下方調整しないといけない場合があります。TCP MSS について (73 ページ) を参照してください。

UDP または ICMP の場合、アプリケーションではフラグメント化を避けるために MTU を考慮する必要があります。



(注) Threat Defense デバイスはメモリに空きがある限り、設定された MTU よりも大きいフレームを受信します。

## MTU とジャンボフレーム

MTU が大きいほど、大きいパケットを送信できます。パケットが大きいほど、ネットワークの効率が良くなる可能性があります。次のガイドラインを参照してください。

- **トラフィックパスの MTU の一致** : すべての Threat Defense インターフェイスとトラフィックパス内のその他のデバイスのインターフェイスでは、MTU が同じになるように設定することを推奨します。MTU の一致により、中間デバイスでのパケットのフラグメント化が回避できます。
- **ジャンボフレームへの対応** : ジャンボフレームが有効な場合、MTU を 9,000 バイト以上に設定できます。最大値はモデルによって異なります。



## TCP MSS について

最大セグメントサイズ (TCP MSS) とは、あらゆる TCP および IP ヘッダーが追加される前の TCP ペイロードのサイズです。UDP パケットは影響を受けません。接続を確立するときのスリーウェイ ハンドシェイク中に、クライアントとサーバーは TCP MSS 値を交換します。

FlexConfig の Sysopt\_Basic オブジェクトを使用して」を参照してください。「#unique\_170」を参照してください。デフォルトで、最大 TCP MSS は 1,380 バイトに設定されます。この設定は、Threat Defense デバイスが IPsec VPN カプセル化のパケットサイズを大きくする必要がある場合に役立ちます。ただし、非 IPsec エンドポイントでは、Threat Defense デバイスの最大 TCP MSS を無効化する必要があります。

最大 TCP MSS を設定すると、接続のいずれかのエンドポイントが Threat Defense デバイスで設定した値よりも大きな TCP MSS を要求した場合に、Threat Defense デバイスは要求パケットの TCP MSS を Threat Defense デバイスの最大値で上書きします。ホストやサーバが TCP MSS を要求しない場合、Threat Defense デバイスは RFC 793 のデフォルト値 536 バイト (IPv4) または 1220 バイト (IPv6) を想定しますが、パケットを変更することはありません。たとえば、MTU をデフォルトの 1500 バイトのままにします。ホストは、1500 バイトの MSS から TCP および IP のヘッダー長を減算して、MSS を 1460 バイトに設定するように要求します。Threat Defense デバイスの最大 TCP MSS が 1380 (デフォルト) の場合は、Threat Defense デバイスは TCP 要求パケットの MSS 値を 1380 に変更します。その後、サーバは、1380 バイトのペイロードを含むパケットを送信します。Threat Defense デバイスはさらに 120 バイトのヘッダーをパケットに追加しますが、それでも 1500 の MTU サイズに収まります。

TCP の最小 MSS も設定できます。ホストまたはサーバが非常に小さい TCP MSS を要求した場合、Threat Defense デバイスは値を調整します。デフォルトでは、最小 TCP MSS は有効ではありません。

SSL VPN 接続用を含め、to-the-box トラフィックの場合、この設定は適用されません。Threat Defense デバイスは MTU を使用して、TCP MSS を導き出します。MTU - 40 (IPv4) または MTU - 60 (IPv6) となります。

### デフォルト TCP MSS

デフォルトでは、Threat Defense デバイスの最大 TCP MSS は 1380 バイトです。このデフォルトは、ヘッダーが最大 120 バイトの IPv4 IPsec VPN 接続に対応しています。この値は、MTU のデフォルトの 1500 バイト内にも収まっています。

### TCP MSS の推奨最大設定

デフォルトでは TCP MSS は、Threat Defense デバイスが IPv4 IPsec VPN エンドポイントとして機能し、MTU が 1500 バイトであることを前提としています。Threat Defense デバイスが IPv4 IPsec VPN エンドポイントとして機能している場合は、最大 120 バイトの TCP および IP ヘッダーに対応する必要があります。

MTU 値を変更して、IPv6 を使用するか、または IPsec VPN エンドポイントとして Threat Defense デバイスを使用しない場合は、FlexConfig の Sysopt\_Basic オブジェクトを使用して TCP MSS 設定を変更する必要があります。



- (注) MSS を明示的に設定した場合でも、TLS/SSL 復号やサーバ検出などのコンポーネントが特定の MSS を必要とする場合、その MSS はインターフェイス MTU に基づいて設定され、MSS 設定は無視されます。

次のガイドラインを参照してください。

- 通常のトラフィック：TCP MSS の制限を無効にし、接続のエンドポイント間で確立された値を受け入れます。一般に接続エンドポイントは MTU から TCP MSS を取得するため、非 IPsec パケットは通常この TCP MSS を満たしています。
- IPv4 IPsec エンドポイントトラフィック：最大 TCP MSS を MTU - 120 に設定します。たとえば、ジャンボフレームを使用しており、MTU を 9000 に設定すると、新しい MTU を使用するために、TCP MSS を 8880 に設定する必要があります。
- IPv6 IPsec エンドポイントトラフィック：最大 TCP MSS を MTU - 140 に設定します。

## ブリッジグループトラフィックの ARP インспекション

デフォルトでは、ブリッジグループのメンバーの間ですべての ARP パケットが許可されます。ARP パケットのフローを制御するには、ARP インспекションを有効にします。

ARP インспекションによって、悪意のあるユーザが他のホストやルータになります (ARP スプーフィングと呼ばれる) のを防止できます。ARP スプーフィングが許可されていると、「中間者」攻撃を受けることがあります。たとえば、ホストが ARP 要求をゲートウェイルータに送信すると、ゲートウェイルータはゲートウェイルータの MAC アドレスで応答します。ただし、攻撃者は、ルータの MAC アドレスではなく攻撃者の MAC アドレスで別の ARP 応答をホストに送信します。これで、攻撃者は、すべてのホストトラフィックを代行受信してルータに転送できるようになります。

ARP インспекションを使用すると、正しい MAC アドレスとそれに関連付けられた IP アドレスがスタティック ARP テーブル内にある限り、攻撃者は攻撃者の MAC アドレスで ARP 応答を送信できなくなります。

ARP インспекションを有効化すると、Threat Defense デバイスは、すべての ARP パケット内の MAC アドレス、IP アドレス、および送信元インターフェイスを ARP テーブル内のスタティック エントリと比較し、次のアクションを実行します。

- IP アドレス、MAC アドレス、および送信元インターフェイスが ARP エントリと一致する場合、パケットを通過させます。
- MAC アドレス、IP アドレス、またはインターフェイス間で不一致がある場合、Threat Defense デバイスはパケットをドロップします。
- ARP パケットがスタティック ARP テーブル内のどのエントリとも一致しない場合、パケットをすべてのインターフェイスに転送 (フラッディング) するか、またはドロップするように Threat Defense デバイスを設定できます。



- (注) 専用の Management インターフェイスは、このパラメータが flood に設定されている場合でもパケットをフラッディングしません。

## MAC アドレス テーブル

ブリッジグループを使用する場合、Threat Defense は、通常のブリッジまたはスイッチと同様に、MAC アドレスを学習して MAC アドレス テーブルを作成します。デバイスがブリッジグループ経由でパケットを送信すると、Threat Defense が MAC アドレスをアドレス テーブルに追加します。テーブルで MAC アドレスと発信元インターフェイスが関連付けられているため、Threat Defense は、パケットが正しいインターフェイスからデバイスにアドレス指定されていることがわかります。ブリッジグループメンバー間のトラフィックには Threat Defense セキュリティポリシーが適用されるため、パケットの宛先 MAC アドレスがテーブルに含まれていなくても、通常のブリッジのように、すべてのインターフェイスに元のパケットを Threat Defense がフラッディングすることはありません。代わりに、直接接続されたデバイスまたはリモートデバイスに対して次のパケットを生成します。

- 直接接続されたデバイスへのパケット：Threat Defense は宛先 IP アドレスに対して ARP 要求を生成し、ARP 応答を受信したインターフェイスを学習します。
- リモート デバイスへのパケット：Threat Defense は宛先 IP アドレスへの ping を生成し、ping 応答を受信したインターフェイスを学習します。

元のパケットはドロップされます。

## デフォルト設定

- ARP インспекションを有効にした場合、デフォルト設定では、一致しないパケットはフラッディングします。
- ダイナミック MAC アドレス テーブル エントリのデフォルトのタイムアウト値は 5 分です。
- デフォルトでは、各インターフェイスはトラフィックに入る MAC アドレスを自動的に学習し、Threat Defense デバイス是对応するエントリを MAC アドレス テーブルに追加します。



- (注) Secure Firewall Threat Defense デバイスはリセットパケットを生成し、ステートフル検査エンジンによって拒否された接続をリセットします。リセットパケットでは、パケットの宛先 MAC アドレスが ARP テーブルのルックアップに基づいて決定されるのではなく、拒否されるパケット（接続）から直接取得されます。

## ARP インспекションと MAC アドレス テーブルのガイドライン

- ARP インспекションは、ブリッジグループでのみサポートされます。
- MAC アドレス テーブル構成は、ブリッジグループでのみサポートされます。

## MTU の設定

たとえば、ジャンボフレームを許可するようにインターフェイスの MTU をカスタマイズします。

、ISA 3000、Threat Defense Virtual の場合：1500 バイトを超える MTU を変更すると、jumbo-frame reservation が自動的に有効になります。ジャンボフレームを使用するには、システムを再起動する必要があります。クラスタリングをサポートする Threat Defense Virtual では、Day0 構成で jumbo-frame reservation を有効にすることができるため、その場合は再起動する必要はありません。再起動後、disable jumbo-frame reservation を無効にすることはできません。Threat Defense Virtual の場合は例外で、サポートされている場合は Day0 構成で jumbo-frame reservation を無効にできます。インラインセットでインターフェイスを使用する場合、MTU 設定は使用されません。ただし、jumbo-frame reservation の設定はインラインセットに関連します。ジャンボフレームによりインラインインターフェイスは最大 9000 バイトの packets を受信できます。jumbo-frame reservation を有効にするには、すべてのインターフェイスの MTU を 1500 バイトより大きい値に設定する必要があります。

ジャンボフレームは、他のプラットフォームではデフォルトで有効化されます。



**注意** デバイス上でデータインターフェイスの最大 MTU 値を変更し、設定の変更を展開すると、Snort プロセスが再起動され、一時的にトラフィックのインспекションが中断されます。インспекションは、変更したインターフェイスだけでなく、すべてのデータインターフェイスで中断されます。この中断でトラフィックがドロップされるか、それ以上インспекションが行われずに受け渡されるかは、管理対象デバイスのモデルおよびインターフェイスタイプに応じて異なります。この注意は、管理専用のインターフェイスには適用されません。詳細については、[Snort の再起動によるトラフィックの動作](#)を参照してください。

### 手順

**ステップ 1** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。

**ステップ 2** 編集するインターフェイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。

**ステップ 3** [全般 (General)] タブで [MTU] を設定します。最小値と最大値は、プラットフォームによって異なります。

デフォルト値は 1500 バイトです。

ステップ4 [OK] をクリックします。

ステップ5 [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

ステップ6 ISA 3000、および Threat Defense Virtual で MTU を 1,500 バイト超に設定する場合は、システムを再起動して jumbo-frame reservation を有効にします。デバイスのシャットダウンまたは再起動を参照してください。

## MAC アドレスの設定

MAC アドレスを手動で割り当てる必要がある場合があります。また、[デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] > [ハイアベイラビリティ (High Availability)] タブで、アクティブ MAC アドレスとスタンバイ MAC アドレスを設定することもできます。両方の画面でインターフェイスの MAC アドレスを設定した場合は、[インターフェイス (Interfaces)] > [詳細 (Advanced)] タブのアドレスが優先されます。



(注) コンテナインスタンスでは、MAC アドレスを手動で設定すると、サブインターフェイスを共有していない場合でも、分類が正しく行われるように、同じ親インターフェイス上のすべてのサブインターフェイスで一貫の MAC アドレスを使用します。

### 手順

ステップ1 [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス[編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。

ステップ2 編集するインターフェイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。

ステップ3 [詳細 (Advanced)] タブをクリックします。  
[情報 (Information)] タブが選択されています。

ステップ4 アクティブおよびスタンバイの MAC アドレスを設定します。

a) [アクティブな MAC アドレス (Active MAC Address)] フィールドに、MAC アドレスを H.H.H 形式で設定します。H は 16 ビットの 16 進数です。

たとえば、MAC アドレスが 00-0C-F1-42-4C-DE の場合、000C.F142.4CDE と入力します。MAC アドレスはマルチキャストビットセットを持つことはできません。つまり、左から 2 番目の 16 進数字を奇数にすることはできません。

b) [スタンバイ MAC アドレス (Standby MAC Address)] フィールドに、ハイアベイラビリティで使用する MAC アドレスを入力します。

アクティブ装置がフェールオーバーし、スタンバイ装置がアクティブになると、新しいアクティブ装置はアクティブな MAC アドレスの使用を開始して、ネットワークの切断を最小限に抑えます。一方、古いアクティブ装置はスタンバイ アドレスを使用します。

**ステップ 5** [OK] をクリックします。

**ステップ 6** [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

## スタティック ARP エントリの追加

デフォルトでは、ブリッジグループのメンバーの間ですべての ARP パケットが許可されます。ARP パケットのフローを制御するには、ARP インспекションを有効にします ([ARP インспекション](#) 参照)。ARP インспекションは、ARP パケットを ARP テーブルのスタティック ARP エントリと比較します。

ルーテッドインターフェイスの場合、スタティック ARP エントリを入力できますが、通常はダイナミック エントリで十分です。ルーテッドインターフェイスの場合、直接接続されたホストにパケットを配送するために ARP テーブルが使用されます。送信者は IP アドレスでパケットの宛先を識別しますが、イーサネットにおける実際のパケット配信は、イーサネット MAC アドレスに依存します。ルータまたはホストは、直接接続されたネットワークでパケットを配信する必要がある場合、IP アドレスに関連付けられた MAC アドレスを要求する ARP 要求を送信し、ARP 応答に従ってパケットを MAC アドレスに配信します。ホストまたはルータには ARP テーブルが保管されるため、配信が必要なパケットごとに ARP 要求を送信する必要はありません。ARP テーブルは、ARP 応答がネットワーク上で送信されるたびにダイナミックに更新されます。一定期間使用されなかったエントリは、タイムアウトします。エントリが正しくない場合 (たとえば、所定の IP アドレスの MAC アドレスが変更された場合など)、新しい情報で更新される前にこのエントリがタイムアウトする必要があります。

トランスペアレントモードの場合、管理トラフィックなどの Threat Defense デバイスとの間のトラフィックに、Threat Defense は ARP テーブルのダイナミック ARP エントリのみを使用します。


### 始める前に

この画面は、名前付きインターフェイスについてのみ使用できます。

### 手順

**ステップ 1** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。

**ステップ 2** 編集するインターフェイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。

- ステップ 3** [詳細 (Advanced) ] タブをクリックして、[ARP] タブをクリックします (トランスペアレントモードでは、[ARP と MAC (ARP and MAC) ])。
- ステップ 4** [ARP 設定を追加 (Add ARP Config) ] (  ) をクリックします。  
[ARP 設定を追加 (Add ARP Config) ] ダイアログボックスが表示されます。
- ステップ 5** [IP アドレス (IP Address) ] フィールドに、ホストの IP アドレスを入力します。
- ステップ 6** [MAC アドレス (MAC Address) ] フィールドに、ホストの MAC アドレスを入力します。たとえば、「00e0.1e4e.3d8b」のように入力します。
- ステップ 7** このアドレスでプロキシ ARP を実行するには、[エイリアスを有効にする (Enable Alias) ] チェックボックスをオンにします。
- Threat Defense デバイスは、指定された IP アドレスの ARP 要求を受信すると、指定された MAC アドレスで応答します。
- ステップ 8** [OK] をクリックし、次にもう一度 [OK] をクリックして、[詳細設定 (Advanced settings) ] を閉じます。
- ステップ 9** [Save (保存) ] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy) ] > [展開 (Deployment) ] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。


## 静的 MAC アドレスの追加とブリッジグループの MAC 学習の無効化

通常、MAC アドレスは、特定の MAC アドレスからのトラフィックがインターフェイスに入ったときに、MAC アドレス テーブルに動的に追加されます。MAC アドレス ラーニングを無効にすることができます。ただし、MAC アドレスをスタティックにテーブルに追加しないかぎり、トラフィックは Threat Defense デバイスを通過できません。スタティック MAC アドレスは、MAC アドレス テーブルに追加することもできます。スタティック エントリを追加する利点の 1 つに、MAC スプーフィングに対処できることがあります。スタティック エントリと同じ MAC アドレスを持つクライアントが、そのスタティック エントリに一致しないインターフェイスにトラフィックを送信しようとした場合、Threat Defense デバイスはトラフィックをドロップし、システム メッセージを生成します。スタティック ARP エントリを追加するときに ([スタティック ARP エントリの追加 \(78 ページ\)](#) を参照)、スタティック MAC アドレス エントリは MAC アドレス テーブルに自動的に追加されます。

### 始める前に

この画面は、トランスペアレントモードの名前付き BVI でのみ使用できます。

### 手順

- ステップ 1** [デバイス (Devices) ] > [デバイス管理 (Device Management) ] を選択し、Threat Defense デバイス [編集 (Edit) ] (  ) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces) ] タブがデフォルトで選択されます。



- ステップ2** 編集するインターフェイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。
- ステップ3** [詳細 (Advanced)] タブをクリックして、[ARP と MAC (ARP and MAC)] タブをクリックします。
- ステップ4** (任意) [MAC ラーニングを有効にする (Enable MAC Learning)] チェックボックスをオフにして MAC ラーニングを無効にします。
- ステップ5** スタティック MAC アドレスを追加するには、[MAC 設定を追加 (Add MAC Config)] をクリックします。  
[MAC 設定を追加 (Add MAC Config)] ダイアログボックスが表示されます。
- ステップ6** [MAC アドレス (MAC Address)] フィールドに、ホストの MAC アドレスを入力します。たとえば、「00e0.1e4e.3d8b」のように入力します。[OK] をクリックします。
- ステップ7** [OK] をクリックして詳細設定を終了します。
- ステップ8** [Save (保存)] をクリックします。

これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。

## セキュリティの設定パラメータの設定

この項では、IP スプーフィングの防止方法、完全フラグメントリアセンブルの許可方法、および [プラットフォーム設定 (Platform Settings)] でデバイス レベルで設定されるデフォルトのフラグメント設定のオーバーライド方法について説明します。

### アンチスプーフィング

この項では、インターフェイスでユニキャストリバースパスフォワーディング (ユニキャスト RPF) を有効にします。ユニキャスト RPF は、ルーティングテーブルに従って、すべてのパケットが正しい送信元インターフェイスと一致する送信元 IP アドレスを持っていることを確認して、IP スプーフィング (パケットが不正な送信元 IP アドレスを使用し、実際の送信元を隠蔽すること) から保護します。

通常、Threat Defense デバイスは、パケットの転送先を判定するときに宛先アドレスだけを調べます。ユニキャスト RPF は、送信元アドレスも調べるようにデバイスに指示します。そのため、リバースパスフォワーディング (Reverse Path Forwarding) と呼ばれます。Threat Defense デバイスの通過を許可するすべてのトラフィックについて、送信元アドレスに戻るルートがデバイスのルーティングテーブルに含める必要があります。詳細については、RFC 2267 を参照してください。

たとえば、外部トラフィックの場合、Threat Defense デバイスはデフォルトルートを使用してユニキャスト RPF 保護の条件を満たすことができます。トラフィックが外部インターフェイスから入り、送信元アドレスがルーティングテーブルにない場合、デバイスはデフォルトルートを使用して、外部インターフェイスを送信元インターフェイスとして正しく識別します。

ルーティングテーブルにあるアドレスから外部インターフェイスにトラフィックが入り、このアドレスが内部インターフェイスに関連付けられている場合、Threat Defense デバイスはパケットをドロップします。同様に、未知の送信元アドレスから内部インターフェイスにトラフィック



クが入った場合は、一致するルート（デフォルトルート）が外部インターフェイスを示しているため、デバイスはパケットをドロップします。

ユニキャスト RPF は、次のように実装されます。

- ICMP パケットにはセッションがないため、個々のパケットはチェックされません。
- UDP と TCP にはセッションがあるため、最初のパケットは逆ルートルックアップが必要です。セッション中に到着する後続のパケットは、セッションの一部として保持されている既存の状態を使用してチェックされます。最初のパケット以外のパケットは、最初のパケットと同じインターフェイスに到着したことを保証するためにチェックされます。

### パケットあたりのフラグメント

デフォルトでは、Threat Defense デバイスは 1 つの IP パケットにつき最大 24 のフラグメントを許可し、最大 200 のフラグメントのリアセンブリ待ちを許可します。NFS over UDP など、アプリケーションが日常的にパケットをフラグメント化する場合は、ネットワークでフラグメント化を許可する必要があります。ただし、トラフィックをフラグメント化するアプリケーションがない場合は、フラグメントが Threat Defense デバイスを通過できないようにすることをお勧めします。フラグメント化されたパケットは、DoS 攻撃によく使われます。

### フラグメントのリアセンブル

Threat Defense デバイスは、次に示すフラグメント リアセンブル プロセスを実行します。

- IP フラグメントは、フラグメントセットが作成されるまで、またはタイムアウト間隔が経過するまで収集されます。
- フラグメントセットが作成されると、セットに対して整合性チェックが実行されます。これらのチェックには、重複、テール オーバーフロー、チェーン オーバーフローはいずれも含まれません。
- Threat Defense デバイスで終端する IP フラグメントは、常に完全にリアセンブルされます。
- [完全フラグメント リアセンブル (Full Fragment Reassembly) ] が無効化されている場合（デフォルト）、フラグメントセットは、さらに処理するためにトランスポート層に転送されます。
- [完全フラグメント リアセンブル (Full Fragment Reassembly) ] が有効化されている場合、フラグメントセットは、最初に単一の IP パケットに結合されます。この単一の IP パケットは、さらに処理するためにトランスポート層に転送されます。

### 始める前に

この画面は、名前付きインターフェイスでのみ使用できます。

## 手順

- 
- ステップ1** [デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)] を選択し、Threat Defense デバイス[編集 (Edit)] (✎) をクリックします。[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。
- ステップ2** 編集するインターフェイス [編集 (Edit)] (✎) をクリックします。
- ステップ3** [詳細 (Advanced)] タブをクリックして、[セキュリティ設定 (Security Configuration)] タブをクリックします。
- ステップ4** ユニキャストリバースパスフォワーディングを有効にするには、[アンチスプーフィングの有効化 (Enable Anti Spoofing)] チェックボックスをオンにします。
- ステップ5** 完全フラグメントリアセンブルを有効化するには、[完全フラグメントリアセンブルを許可 (Allow Full Fragment Reassembly)] チェックボックスをオンにします。
- ステップ6** パケットごとに許容するフラグメント数を変更するには、[デフォルトフラグメント設定のオーバーライド (Override Default Fragment Setting)] チェックボックスをオンにして、次に示す値を設定します。
- **サイズ (Size)** : リアセンブルを待機する IP リアセンブル データベースに格納可能なパケットの最大数を設定します。デフォルトは 200 です。この値を 1 に設定すると、フラグメントが無効化されます。
  - **チェーン (Chain)** : 1 つの完全な IP パケットにフラグメント化できる最大パケット数を指定します。デフォルトは 24 パケットです。
  - **タイムアウト (Timeout)** : フラグメント化されたパケット全体が到着するまで待機する最大秒数を指定します。タイマーは、パケットの最初のフラグメントの到着後に開始されます。指定した秒数までに到着しなかったパケットフラグメントがある場合、到着済みのすべてのパケットフラグメントが廃棄されます。デフォルトは 5 秒です。
- ステップ7** [OK] をクリックします。
- ステップ8** [Save (保存)] をクリックします。
- これで、[展開 (Deploy)] > [展開 (Deployment)] をクリックし、割り当てたデバイスにポリシーを展開できるようになりました。変更はポリシーを展開するまで有効になりません。
-

## Secure Firewall Threat Defense の通常のファイアウォールインターフェイスの履歴

機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
VXLAN VTEP IPv6 のサポート	7.4	任意 (Any)	<p>VXLAN VTEP インターフェイスに IPv6 アドレスを指定できるようになりました。IPv6 は、Threat Defense Virtual クラスタ制御リンクまたは Geneve カプセル化ではサポートされていません。</p> <p>新しい/変更された画面：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [デバイス (Devices) ]&gt;[デバイス管理 (Device Management) ]&gt; [編集 (Edit) ]&gt; [VTEP]&gt; [VTEPの追加 (Add VTEP) ]</li> <li>• [デバイス (Devices) ]&gt;[デバイス管理 (Device Management) ]&gt; [編集 (Edit) ]&gt;[インターフェイス (Interfaces) ]&gt;[インターフェイスの追加 (Add Interfaces) ]&gt; [VNIインターフェイス (VNI Interface) ]</li> </ul> <p>Threat Defense バージョン 7.4 が必要です。</p>
BGP と管理トラフィックのループバック インターフェイスをサポート	7.4	任意 (Any)	<p>ループバック インターフェイスは、次の目的で使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• AAA</li> <li>• BGP</li> <li>• DNS</li> <li>• HTTP</li> <li>• ICMP</li> <li>• IPsec フローのオフロード</li> <li>• NetFlow</li> <li>• SNMP</li> <li>• SSH</li> <li>• Syslog</li> </ul> <p>Threat Defense バージョン 7.4 が必要です。</p>

機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
VTIのループバックインターフェイスサポート	7.3	任意 (Any)	<p>ループバックインターフェイスを追加できるようになりました。ループバックインターフェイスは、パス障害の克服に役立ちます。インターフェイスがダウンした場合、ループバックインターフェイスに割り当てられたIPアドレスを使用してすべてのインターフェイスにアクセスできます。VTIの場合、送信元インターフェイスとしてループバックインターフェイスを設定するのに加えて、静的に設定されたIPアドレスの代わりに、ループバックインターフェイスからIPアドレスを継承するサポートも追加されています。</p> <p>新しい変更された画面：</p> <p>[デバイス (Devices) ]&gt;[デバイス管理 (Device Management) ]&gt;[インターフェイス (Interfaces) ]&gt;[インターフェイスの追加 (Add Interfaces) ]&gt;[ループバックインターフェイスの追加 (Add Loopback Interface) ]</p>

機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
IPv6 DHCP	7.3	任意 (Any)	<p>Threat Defense で IPv6 アドレッシングの次の機能がサポートされるようになりました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• DHCPv6 アドレスクライアント : Threat Defense は DHCPv6 サーバーから IPv6 グローバルアドレスとオプションのデフォルトルートを取得します。</li> <li>• DHCPv6 プレフィックス委任クライアント : Threat Defense は DHCPv6 サーバーから委任プレフィックスを取得します。Threat Defense は、委任プレフィックスを使用して他の Threat Defense インターフェイスのアドレスを設定し、ステートレスアドレス自動設定 (SLAAC) クライアントが同じネットワーク上で IPv6 アドレスを自動設定できるようにします。</li> <li>• 委任プレフィックスの BGP ルータ アドバタイズメント</li> <li>• DHCPv6 ステートレスサーバー : SLAAC クライアントが Threat Defense に情報要求 (IR) パケットを送信すると、Threat Defense はドメイン名などの他の情報を SLAAC クライアントに提供します。Threat Defense は、IR パケットを受け取るだけで、クライアントにアドレスを割り当てません。</li> </ul> <p>新しい/変更された画面 :</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [デバイス (Devices) ] &gt; [デバイス管理 (Device Management) ] &gt; [インターフェイス (Interfaces) ] &gt; [インターフェイスの追加/編集 (Add/Edit Interfaces) ] &gt; [IPv6] &gt; [DHCP]</li> <li>• [オブジェクト (Objects) ] &gt; [オブジェクト管理 (Object Management) ] &gt; [DHCP IPv6 プール (DHCP IPv6 Pool) ]</li> </ul> <p>新規/変更されたコマンド : <code>show bgp ipv6 unicast</code>、<code>show ipv6 dhcp</code>、<code>show ipv6 general-prefix</code></p>

機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
Azure ゲートウェイロードバランサの Threat Defense Virtual のペアプロキシ VXLAN	7.3	任意 (Any)	<p>Azure ゲートウェイロードバランサ (GWLB) で使用するために、Azure で Threat Defense Virtual 用のペアプロキシモード VXLAN インターフェイスを設定できます。Threat Defense Virtual は、ペアリングされたプロキシの VXLAN セグメントを利用して、単一の NIC に外部インターフェイスと内部インターフェイスを定義します。</p> <p>新しい変更された画面：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [デバイス (Devices) ] &gt; [デバイス管理 (Device Management) ] &gt; [デバイス (Device) ] &gt; [インターフェイス (Interfaces) ] &gt; [インターフェイスの追加 (Add Interfaces) ] &gt; [VNI インターフェイス (VNI Interface) ]</li> </ul> <p>サポートされているプラットフォーム：Azure の Threat Defense Virtual</p>
VXLAN のサポート	7.2	任意 (Any)	<p>VXLAN カプセル化のサポートが追加されました。</p> <p>新しい変更された画面：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [デバイス (Devices) ] &gt; [デバイス管理 (Device Management) ] &gt; [デバイス (Device) ] &gt; [VTEP]</li> <li>• [デバイス (Devices) ] &gt; [デバイス管理 (Device Management) ] &gt; [デバイス (Device) ] &gt; [インターフェイス (Interfaces) ] &gt; [インターフェイスの追加 (Add Interfaces) ] &gt; [VNI インターフェイス (VNI Interface) ]</li> <li>• [デバイス (Devices) ] &gt; [デバイス管理 (Device Management) ] &gt; [デバイス (Device) ] &gt; [インターフェイス (Interfaces) ] [物理インターフェイスの編集 (edit physical interface) ] &gt; [全般 (General) ]</li> </ul> <p>サポートされているプラットフォーム：すべて。</p>

機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
Threat Defense Virtual の Geneve サポート	7.1	任意 (Any)	<p>Amazon Web Services (AWS) ゲートウェイロードバランサのシングルアームプロキシをサポートするために、Geneveカプセル化サポートが Threat Defense Virtual に追加されました。AWS ゲートウェイロードバランサは、透過的なネットワークゲートウェイ (全トラフィックの唯一の出入口) と、トラフィックを分散し、トラフィックの需要に合わせて Threat Defense Virtual を拡張するロードバランサを組み合わせます。</p> <p>この機能には Snort 3 が必要です。</p> <p>新しい/変更された画面：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [デバイス (Devices) ]&gt;[デバイス管理 (Device Management) ]&gt; [デバイス (Device) ]&gt; [VTEP]</li> <li>• [デバイス (Devices) ]&gt;[デバイス管理 (Device Management) ]&gt; [デバイス (Device) ]&gt;[インターフェイス (Interfaces) ]&gt;[インターフェイスの追加 (Add Interfaces) ]&gt; [VNIインターフェイス (VNI Interface) ]</li> <li>• [デバイス (Devices) ]&gt;[デバイス管理 (Device Management) ]&gt; [デバイス (Device) ]&gt;[インターフェイス (Interfaces) ] [物理インターフェイスの編集 (edit physical interface) ]&gt;[全般 (General) ]</li> </ul> <p>サポートされているプラットフォーム：AWS の Threat Defense Virtual</p>
31 ビット サブネット マスク	7.0	任意 (Any)	<p>ルーテッドインターフェイスに関しては、ポイントツーポイント接続向けの31ビットのサブネットにIPアドレスを設定できます。31ビットサブネットには2つのアドレスのみが含まれます。通常、サブネットの最初と最後のアドレスはネットワーク用とブロードキャスト用に予約されており、2アドレスサブネットは使用できません。ただし、ポイントツーポイント接続があり、ネットワークアドレスやブロードキャストアドレスが不要な場合は、IPv4形式でアドレスを保持するのに31サブネットビットが役立ちます。たとえば、2つのFTD間のフェールオーバーリンクに必要なアドレスは2つだけです。リンクの一方の側から送信されるパケットはすべてもう一方の側で受信され、ブロードキャストは必要ありません。また、SNMPやSyslogを実行する管理ステーションを直接接続することもできます。この機能は、ブリッジグループ用のBVI、またはマルチキャストルーティングではサポートされていません。</p> <p>新しい/変更された画面：</p> <p>[デバイス (Devices) ]&gt;[デバイス管理 (Device Management) ]&gt;[インターフェイス (Interfaces) ]</p>

機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
Firepower 4100/9300 の Threat Defense 動作リンク状態と物理リンク状態の同期	6.7	任意 (Any)	<p>Firepower 4100/9300 シャーシで、Threat Defense 動作リンク状態をデータインターフェイスの物理リンク状態と同期できるようになりました。現在、FXOS 管理状態がアップで、物理リンク状態がアップである限り、インターフェイスはアップ状態になります。Threat Defense アプリケーション インターフェイスの管理状態は考慮されません。Threat Defense からの同期がない場合は、たとえば、Threat Defense アプリケーションが完全にオンラインになる前に、データインターフェイスが物理的にアップ状態になったり、Threat Defense のシャットダウン開始後からしばらくの間はアップ状態のままになる可能性があります。インラインセットの場合、この状態の不一致によりパケットがドロップされることがあります。これは、Threat Defense が処理できるようになる前に外部ルータが Threat Defense へのトラフィックの送信を開始することがあるためです。この機能はデフォルトで無効になっており、FXOS の論理デバイスごとに有効にできます。</p> <p>(注) この機能は、クラスタリング、コンテナインスタンス、または Radware vDP デコレータを使用する Threat Defense ではサポートされていません。ASA でもサポートされていません。</p> <p>新規/変更された [Firepower Chassis Manager] 画面：[論理デバイス (Logical Devices)] &gt; [リンク状態の有効化 (Enable Link State)]</p> <p>新規/変更された FXOS コマンド：<b>set link-state-sync enabled、show interface expand detail</b></p> <p>サポートされるプラットフォーム：Firepower 4100/9300</p>
Firepower 1010 ハードウェア スイッチのサポート	6.5	任意 (Any)	<p>Firepower 1010 では、各イーサネット インターフェイスをスイッチポートまたはファイアウォール インターフェイスとして設定できます。</p> <p>新しい/変更された画面：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [デバイス (Devices)] &gt; [デバイス管理 (Device Management)] &gt; [インターフェイス (Interfaces)]</li> <li>• [デバイス (Devices)] &gt; [デバイス管理 (Device Management)] &gt; [インターフェイス (Interfaces)] &gt; [物理インターフェイスの編集 (Edit Physical Interface)]</li> <li>• [デバイス (Devices)] &gt; [デバイス管理 (Device Management)] &gt; [インターフェイス (Interfaces)] &gt; [VLAN インターフェイスの追加 (Add VLAN Interface)]</li> </ul>



機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
イーサネット 1/7 およびイーサネット 1/8 の Firepower 1010 PoE+ のサポート	6.5	任意 (Any)	<p>Firepower 1010 は、スイッチ ポートとして設定されている場合、イーサネット 1/7 およびイーサネット 1/8 の Power on Ethernet+ (PoE+) をサポートします。</p> <p>新しい/変更された画面：</p> <p>[デバイス (Devices)] &gt; [デバイス管理 (Device Management)] &gt; [インターフェイス (Interfaces)] &gt; [物理インターフェイスの編集 (Edit Physical Interface)] &gt; [PoE]</p>
コンテナインスタンスで使用される VLAN サブインターフェイス	6.3.0	いずれか	<p>柔軟な物理インターフェイスの使用を可能にするため、FXOS で VLAN サブインターフェイスを作成し、複数のインスタンス間でインターフェイスを共有することができます。</p> <p>新規/変更された Secure Firewall Management Center 画面：</p> <p>[デバイス (Devices)] &gt; [デバイス管理 (Device Management)] &gt; [編集 (Edit)] アイコン &gt; [インターフェイス (Interfaces)] タブ</p> <p>新規/変更された Secure Firewall Chassis Manager 画面：</p> <p>[インターフェイス (Interfaces)] &gt; [すべてのインターフェイス (All Interfaces)] &gt; [新規追加 (Add New)] ドロップダウンメニュー &gt; [サブインターフェイス (Subinterface)]</p> <p>新規/変更された FXOS コマンド：<b>create subinterface、set vlan、show interface、show subinterface</b></p> <p>サポートされるプラットフォーム：Firepower 4100/9300</p>
コンテナインスタンスのデータ共有インターフェイス	6.3.0	いずれか	<p>柔軟な物理インターフェイスの使用を可能にするため、複数のインスタンス間でインターフェイスを共有することができます。</p> <p>新規/変更された Secure Firewall Chassis Manager 画面：</p> <p>[インターフェイス (Interfaces)] &gt; [すべてのインターフェイス (All Interfaces)] &gt; [タイプ (Type)]</p> <p>新規/変更された FXOS コマンド：<b>set port-type data-sharing、show interface</b></p> <p>サポートされるプラットフォーム：Firepower 4100/9300</p>

機能	最小 Management Center	最小 Threat Defense	詳細
統合ルーティングおよびブリッジング	6.2.0	いずれか	<p>統合ルーティングおよびブリッジングによって、ブリッジグループとルーテッドインターフェイスの間でルーティングする機能が提供されます。ブリッジグループは、Threat Defense がルーティングではなくブリッジするインターフェイスのグループです。Threat Defense は、Threat Defense がファイアウォールとして機能し続ける点で本来のブリッジとは異なります。つまり、インターフェイス間のアクセス制御が実行され、通常のファイアウォール検査もすべて実行されます。以前は、トランスペアレント ファイアウォール モードでのみブリッジグループの設定が可能だったため、ブリッジグループ間でのルーティングはできませんでした。この機能を使用すると、ルーテッドファイアウォール モードのブリッジグループの設定と、ブリッジグループ間およびブリッジグループとルーテッドインターフェイス間のルーティングを実行できます。ブリッジグループは、ブリッジ仮想インターフェイス (BVI) を使用して、ブリッジグループのゲートウェイとして機能することによってルーティングに参加します。Threat Defense にブリッジグループを割り当てるための追加インターフェイスがある場合、統合ルーティングおよびブリッジングによって、外部のレイヤ 2 スイッチを使用するのではない別の方法が提供されます。ルーテッドモードでは、BVI は名前付きインターフェイスとなり、アクセスルールやDHCP サーバなどの一部の機能に、メンバーインターフェイスとは個別に参加できます。</p> <p>トランスペアレント モードでサポートされるクラスタリングの機能は、ルーテッドモードではサポートされません。マルチキャストルーティングとダイナミックルーティングの機能も、BVIではサポートされません。</p> <p>新規/変更された画面：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• [デバイス (Devices) ]&gt;[デバイス管理 (Device Management) ]&gt; [インターフェイス (Interfaces) ]&gt;[物理インターフェイスの編集 (Edit Physical Interface) ]</li> <li>• [デバイス (Devices) ]&gt;[デバイス管理 (Device Management) ]&gt; [インターフェイス (Interfaces) ]&gt;[インターフェイスを追加 (Add Interfaces) ]&gt;[ブリッジグループインターフェイス (Bridge Group Interface) ]</li> </ul> <p>サポートされているプラットフォーム：すべて (Firepower 2100 と Threat Defense Virtual を除く)</p>

## 翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。